



漱石と超人思想の系譜：
ミケランジェロ、バクスターニン、ニーチェ

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中江, 彬 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00004500 |

漱石と超人思想の系譜

—ミケランジェロ、バクーニン、ニーチェ—

中江 彬

はじめに

日本でニーチェが一般に知られるようになるのは、夏目漱石が『ホトトギス』の主筆者高浜虚子から依頼されて明治三十八年から九年にかけて書いた小説『吾輩は猫である』七（以後は『猫』と省略）においてであろう。「うめろうめろう、熱い熱い」と銭湯の群集から傑出した男を見て吾輩はこう叫ぶ。

超人だ。ニーチェのいわゆる超人だ。魔中の大王だ。化け物の棟梁だ。

『猫』十一では哲学者の八木独仙がこう述べる。人間に個性を許せば許すほどお互いの間が窮屈になるに相違なく、ニーチェが超人なんかかつぎ出すのも全くこの窮屈のやり所がないからで、しかたなしにあんな哲学に変形したのであり、あれは理想ではなく、「怨恨痛憤の声だ」と。このように漱石は小説の中にニーチェの超人を紹介した。ではなぜニーチェの超人は銭湯の中に登場したのだろうか。

ドイツ留学から帰国した東京大学教授井上哲次郎は明治二十四年（一八九一）に、キリスト教がドイツでも信仰されなくなっていると見て、日本のキリスト教徒、特に内村鑑三の行為を日本の国体にそぐわぬと非難した。それから十年後、明治三十四年に東京大学出身の戸張竹風が『帝国文学』で「フリードリヒ、ニーチェ」について書き、『太陽』では高山樗牛もニーチェ論をおこない非難を浴びた。明治三十三年にドイツに留学した仏教学者・東京大学助教授姉崎嘲風は、明治三十五年二、三月に、ドイツから高山樗牛に宛てた公開書簡「高山樗牛に答ふるの書」（『太陽』）で、樗牛が決意した日本美術研究の大成を切望すると語り、さらに「東洋の美術国といひながら未だ一の美術史あらず、否ありと雖も皆真の史にあらずして目録説明のみ存する」と述べ、さらにこう語る。日本では「愛国的自負心の虚栄自負」が「外国を排斥的に毛嫌しつづ」あり、日本人が自ら支那でなした蛮行は棚にあげて、支那人の蛮行を非難し、ドイツ国家説を輸入してドイツ崇拜をなしている。ドイツでは、恩寵の神

を「意志の神」に代え、法王を「国君」に代えた新教は「自負と酷薄との人情を養成し」、カイゼルが「支那をうちこらし、千年の後まで其痛みを感じしめよといえば万民忽ちに之に和し、文明の皮を脱して蛮行を演じ、下走卒児童に至るまで支那人黄色人種を悪み、路行く我等に対してまでも石を投げ罵言を放つ」。「大多数の人民が虚栄心かられ国土膨張の名を歓呼」する。「ドイツの文明は我国のと同じく精神を失ひ、自家の立場を忘れて虚栄に走らんとせり、されど之に反抗し社会の総ての方便形式主義を打撃し、個人精神の要求に無限の尊厳を附与せんとするニーチェ主義が滔々として青年の間に行われつゝあり」として、ワーグナー、ベックリンの絵画についても紹介した。さらに「再び高山樗牛に与ふる書」においてワーグナーとニーチェの関係についても触れた。『猫』に登場する奇妙な哲学者八木独仙のモデルはおそらくこの姉崎にちがいない。なぜなら樗牛は明治三十五年に没してしまふからである。正岡子規も同年九月に亡くなる。明治三十六年一月に留学から帰国した漱石は、日露戦争が勃発した明治三十七年に、『猫』を書いたが、漱石が小説に超人を登場させた理由を求めて、超人思想の系譜をたどろう。

清輝の裸体画

『猫』では、吾輩たる猫が日本人の裸体画や裸体の醜さを酷評し

ているとき「ニーチェの超人」が比喩的に銭湯に現れる。裸体とニーチェはどのような関係があるのだろうか。

明治三十四年、漱石がロンドンにいたとき、黒田清輝は第五回パリ万国博覧会に出品するためと、美術調査のために訪れたパリで《裸体婦人図》〔本頁図版参照〕を描き、帰国後すぐに白馬会展に出品すると、警察がきて注意した。白馬会事務局は自発的に裸体の



黒田清輝
《裸体婦人図》
明治34年



中央新聞、明治34年
10月31日



一条成美『明星』表紙、
明治33年9月

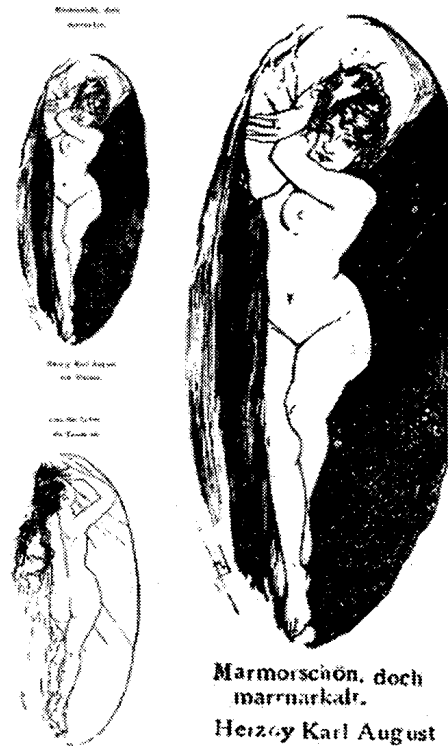
腰から下に布を張り展示したが〔本頁図版〕、文部大臣西園寺公望が訪れたとき、布をとって見せたことを新聞記者が目撃し、新聞にそのことを書いたことから裸体画批判が起きた。当時、『明星』には一条成美のデザインでよく似たポーズの裸体画が口絵にいれられていたが、それに対して咎めはなかった。恥部が見えそうところが悪かったのかもしれない。それでドイツ、フランス、イタリアで美術を研究して来た東京大学最初の日本人の美学教授大塚保治に東京美術学校教官大村西崖が依頼して、学校で学生を前に「裸体と美術」と題して講演させた。大塚は裸体画が西洋でも批判されたと述べ、最初の例としてミケランジェロの《最後の審判》批判を紹介し

た。そのときジョルジョ・ヴァザーリの『ミケランジェロ伝』の《最後の審判》に関する内容を説明したが、おそらくこれは日本における最も詳しいミケランジェロ紹介であろう。

ジョルジョ・ヴァザーリの『ミケランジェロ伝』（一五六八年）を読んだ大塚保治は、儀典長ピアジオがミケランジェロの裸体画を批判したのでミケランジェロによって地獄の閻魔大王に描かれたと説明した。漱石はその説明文を読んだためか、ミケランジェロの《最後の審判》における魔中の大王（ミノス）を『猫』の中に登場させた。ヴァザーリはこう語っていた。ピアジオは裸体表現がある種の「宿屋や風呂屋」に見られる類であるために、ヴァティカンのシステイーナ礼拝堂にはふさわしくないと批判したので、そのような宿屋に行く儀典長はミケランジェロによって地獄の大王として描かれてしまったという。これは近代美術史最初の裸体画批判であるが、漱石はこのブラック・ユーモアを利用して、吾輩に銭湯を覗かせ、閻魔大王ミノスを「魔中の大王」にしていた。この対応の仕方はダンテが『神曲』でおこなった批判方法である。白馬会の画家たちは裸体画を高尚だと述べていたので、吾輩が覗いた白濁した銭湯はまさにダンテの地獄の比喩になり、魔中の大王が登場する。

明治三十三年十一月二十七日発行の新詩社『明星』第八号（全九十二頁）に一条成美の筆の裸体女性像スケッチがあつた。そこには

「Marmor Schön, doch marmarkalt」（大理石の美的、されども大理石の冷たき）」「Heizoy Karl August von Weimae」（ハイゾオイ・カール・アウグスト・フォン・ヴァイマール）」という言葉とともに裸婦の横たわる正面、そして「dass, das Leben ein Traum sei」（人生は夢なり、と）」「Johann Wolfgang Goethe」（ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ）」と言葉と裸婦の背中が掲載されていた。それらの詩句は断片ゆ



Marmor Schön, doch
marmarkalt.
Heizoy Karl August
von Weimar.
dass, das Leben
ein Traum sei.
Jahann Wolfgang
Goethe.

一条成美、『明星』
8号挿絵、
明治33年11月27日

えに意味は不明である。明治三十四年十二月六日にその号は発売禁止になり（本当は前田林外の詩「黄色難」——支那にへ魔王争うて生血もとむ……人道を亡ずるもの、平和会議、何ぞ茶番にあらざらんや、世界博覧会、わづかに皮相の文明を銜ふ、まこと彼等は人間の公敵——に対する別件禁止だったろう）、同年十二月十二日に与謝野鉄幹は『明星』第九号を十五頁で臨時発行してこう書いた。

『明星』第八号は本月六日を以て風俗壞乱の悪名の下に、内務大臣〔末松謙澄〕より発売を禁止せられ候。その理由とする所は未だ明示せられず候へども、伝ふる所によれば、仏国の裸体画を掲載せしが即ち風俗壞乱の所為の由に候。美術の神と梅毒の神とを同一視せられ候時代は、後世歴史に於て光彩を放ち候と存じ候。

裸体画と梅毒は結びつけられ、裸体画が公娼との関連で風俗壞乱と認定された。このように裸体画が梅毒問題とむすびつけられた理由は明治二十二年頃の公娼制度廃止論議と関連している。植木枝盛、外山正一は公娼を廃止しろと論じたが、一方公衆衛生に関する医師団は公娼制度を廃止すれば、梅毒が蔓延すると述べた。このような会議に招かれた軍医の森鷗外は、皆の期待をよそにデータを述べて、公娼制度は廃止すべきだと論じた。しかし日清戦争の時代でも公娼制度は廃止されず、裸体画は若者を公娼に赴かせる原因になると論じられ、その脈絡で一条成美筆の裸体画デッサンは吉原などの風俗営業と関連させられた。漱石は『猫』の単行本で浅井忠に挿絵で、スランタンが一八九八年七月の『ミルリトン』第一一七号一頁に掲載した「コレラが来たぞ……」(Via Cholera q'arrive)の構図を応用させた。コレラは当時の恐怖の病気であり、鷗外はコレラ菌の発見者コッホに学ぶために明治十七年にドイツに留学していた。コレラとともに梅毒の蔓



延にも恐れられた。スランタンはコレラを髑髏の旅行者として表現したが、浅井は頑固で金力に屈せぬ苦沙弥先生を髑髏の死神と入れ替えたので、戦争を嫌う苦沙弥は当時の財閥には死神に見えたらう。

大塚の「裸体と美術」の口述筆記が同年の『帝國文学』十一月号に掲載され、同時に戸張竹風のニーチェ論もあった。戸張は六月から十月にかけて「フリードリッヒ、ニーチェを論ず」を書き、十一月の最終回「フリードリッヒ、ニーチェを論ず・余論」でこう書いていた。

吾国の道徳は今如何。旧道徳廢れて新道徳未だ起らず。……日本唯一の大教育家の団体たる帝國教育会は、陳腐平凡なる教育雑誌の発行と夏季講習会を開くとの外、および時々、文部省の政策に向て、猜疑的狐狸的妨礙を加ふるの外、何等の見るべき功績ありや。青年諸君よ、諸君の時代は実に個人主義の時代にあらずや。諸君にして、もし区々たる世間の事業に参与し、あるいは慈善と称へ、あるいは社会のためといひ、老衰者もしくは婦女子のなすがごとき事業を営むことあらば、これすでに諸君なきなり。……諸君はまた、白馬会に関する最近の醜聞

を聞けりや。裸体画の下身を纏布まとひきぬれもて蔽おほへるは、最も裸体画の青年諸君に与ふる影響如何の恐懼おそに出づといふ。これ実に、諸君を侮辱せるの甚はなはしきものにあらずや。このごとく醜なるものを示さむよりも、むしろ全く裸体画全体を示さざることの遙かに快なるは、何人も信じて疑はざる所なり。芸術とはそもそも何の謂れぞ。美とはそもそも何の謂れぞ。芸術的人生とはそもそも何の謂ぞ。諸君もし現代に平からならずしてこれを知らむと欲せば、請ふ、ニーチェを読め。

戸張が裸体とニーチェを結び付けたので、超人が『猫』で裸体ばかりの銭湯に登場する理由の一端は分かる。『猫』九〔明治三十九年三月三十日発行〕では竹風は天道公平の名前で登場し、巢鴨の頓狂院の住民にされるが、実際は巢鴨刑務所に拘禁された社会主義者幸徳秋水の暗示であり、幸徳秋水の戦争政策批判が隠されている。

『猫』は日露戦争最中の明治三十八年から三十九年に発表され、主題は、高等遊民のたわごとではなく商業としての戦争への痛烈な風刺である。すべては当時の読者なら理解できた滑稽な比喻として語られ、戦争で増税にあえぐ国民の憤懣を代弁した。最初の一章は短編であったが、好評のために続編が十一章まで書き続けられた。

最初に書いた短編〔『猫』一〕で漱石は、黒田清輝の絵画と人格を〇〇と秘して嘲弄した。大塚保治を彷彿とさせる美学者の迷亭は、

絵は難しいと語る小説の主人公苦沙弥に河鍋曉斎の画論をアンドレ



ミケランジェロ《最後の審判》
のカロン 1540年頃、
システイーナ礼拝堂

ア・デル・サルトの画論として語らせ、自然は一幅の大活画（パノラマ）であるから、写生しろと言った。それで苦沙弥は縁側に寝ている猫の吾輩を写生するが、吾輩はそれ見ると、それは目も無く色もまだらであり、怒る。それどころか小用に立つと、「馬鹿野郎」と怒鳴られて憤慨する。庭にでると車屋の黒猫が寝ている。梧桐の葉がばらばらと落ちる。目を開けるとまん丸の琥珀の色をしている。車屋の「くろ」という真つ黒な猫であり、この表現もダンテの『神曲』地獄篇第三歌の三途の川の渡し守カロンの語り口に倣っているし、ミケランジェロが描いた《カロン》〔本頁図版参照〕を念頭においたかもしれない。猫の吾輩は、苦沙弥が日記に〇〇の奥さんは芸者だそうだ、うらやましいことだ、と書くのを批判する。

この挿話は下手な吾輩の肖像画の話題と関連していた。〇〇とは、黒田清輝のことである。明治二十六年にフランス留学から帰国した清輝は《昼寝》〔本頁図版参照〕を描いた。その絵には木の下で昼



黒田清輝《智・感・情》
明治26年



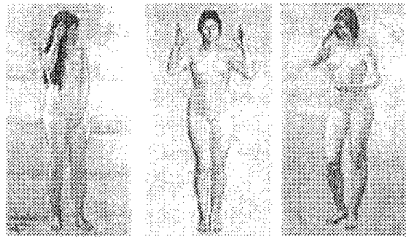
河鍋曉斎《猫》
明治20年



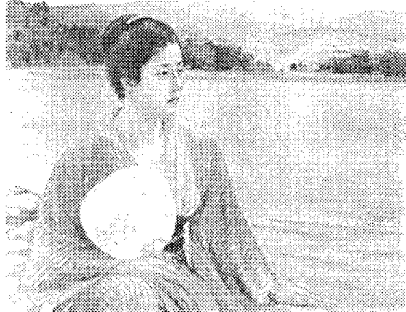
ピゴー《黒田清輝の
裸体画》『ショッキング
グ・オヴ・ジャパン』
明治26年

寝する女性がまだらの色で描かれていて、子規はそのような印象派を思わせる絵を紫派、浅井忠たちの写実的絵画を脂派と名づけた。

樗牛がその絵を批評したことから、森鷗外との間で印象派論争を惹起していた。その論争を背景にして、漱石は『猫』で苦沙弥に昼寝する猫をまだらに描かせ「暁斎の絵も手本になっている」、吾輩を怒



黒田清輝《智・感・情》明治32年完成



黒田清輝《湖畔》明治30年



高村光雲ほか《西郷隆盛像》
明治31年に上野公園に設置

らせた。それどころか、清輝が《湖畔》において内妻照子を描いたどころか、明治三十三年の第五回パリ万国博覧会に出品して銀賞を獲得した巨大な三幅対の裸体画《智・感・情》「本頁図版参照、中央女性が照子の顔に酷似していたので、○○という伏字にして清輝を

放蕩者と書かせた。当時、漱石は日記断片に「西郷の銅像を卸しに、團子の串に、日本一の美人の首をさして、東京市の記念とす。」と書いていた。したがって漱石は明治三十一年十二月に除幕された上野公園の《西郷隆盛像》「本頁図版参照」と《智・感・情》の美女とをすげ替えていたようだ。なぜなら、ともに写実的作品だったからである。とくに正岡子規は明治三十三年一月二日の「銅像雑感」で、ある田舎者が西郷像を「お相撲さん」のようだと形容したと記したので、西郷像もまた裸体画と同系列で批評される。漱石の小説に挿絵をいれる中村不折は、明治三十四年に「罵倒録」(たぶん『ホトトギス』掲載)に「箱根の湖畔に妾をかくといふ西洋思想が一番よいものと思つたり、鼻柱が額から真すぐに起つてこなくちや美じやないと思つたりする」と清輝の女性像が照子の顔だと暴露した。それで当時の読者には○○が清輝だと分かっていった。

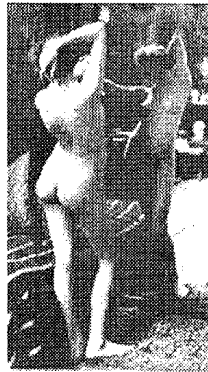
黒田清輝の《朝妝》と《昔語り》

清輝は明治二十八年の第四回内国勸業博覧会にパリで描いた《朝妝》を展示して裸体画論争を惹起していた。フランスの画家ピゴーはその展示光景を漫画にしたが、そこには警察官の前に一般庶民が群がって鑑賞している。しかし、それは漫画であって、当時、博覧会を見学したラフカディオ・ハーンは農民たち多くの見物客が高価

な値がつけられたその裸体画には一瞥するだけで通りすぎ、安い値がつけられた掛け軸に見入ったという。そしてハーンはこの絵を駄作だと批評した。フランスの画家にウジェーヌ・ボードダンという人がいて、ヌードモデルを雇う金が高いので、ヌード写真を自分で撮影しただけでなく、販売していた。清輝が《朝妝》を描く二年前頃、同じ構図の写真を撮っているの、清輝はそれを逆にして裸体画に



黒田清輝《朝妝》
明治26年〔1993〕
パリで制作



ウジェーヌ・ボードダン
《鏡とヌード》(左右逆転)
明治23年(1990)頃

したようだ。清輝はそのような裸体画を「高尚」と述べたので、漱石は猫の吾輩に酷評させる。その意見は国会議員野口勝一の裸体画批判(明治二十八年十月『絵画叢誌』一〇五巻)を反映させていた。

東京大学教授小泉八雲(ラファディオ・ハーン)は明治二十八年の『旅行日記』に内国勧業博覧会のと清輝の裸体画について書いた。

大きな鏡に向つた全身裸の婦人を描いた一画面が公衆の悪感を惹起した。全国の新開紙はその画の撤回を要求し、西洋の芸術観に対しては香ばしからぬ意見を吐いていた。しかしその絵は日本の画家の作であつた。それは駄作であつたが、思ひ切つて三千弗といふ値段がついていた。

自分は少時その前に立つた。この絵の衆人に与へる感興を観察しようと思つたのである。観衆の大多数は農民で、驚ひて見てはせせら笑ひ、何か嘲るやうな言葉を遺して、十円乃至三十五円といふ値段付けてこそあれ、遙かに見ごたへのある掛物の方へ往つて了ふ。

さらにハーンは裸体画について語り、このとき「超人的」という言葉を使った。

神聖なる裸体、絶対美の抽象である裸体は観る者に幾分悲哀を交へた驚嘆と歎息との衝撃を与える。美術の作品にしてこれを与えるものは少ない、完全に近いものが少ないからである。しかしさう云ふ大理石や寶石細工がある。また、『芸術愛好会』で出版した版画のような、それらの作品の精巧な模写がある。視れば視るほど驚嘆の念が深くなる。一つの線でも、その一部分でも、その美がすべての記憶を超絶していないものはない。それゆえこういふ芸術の秘訣は古来超自然と考へられた。事実またそれが与える美の観念は人間以上である。現在の人生以外であると云ふ意味に於て超人間的である。すなはち人間の知れる感覚の及ぶ限りに於て超自然である。

河北仙史(野口勝一)は明治二十八年五月の『絵画叢誌』にこう書いた。裸体画美人を好める欧米の俗は説を作す〔に〕種々なり。これ

を要するに、曲線配合〔構図〕を以て美の最上となし、裸体美人を写すを以て真美これに在りと称し、理〔理論〕の一遍〔一部〕に拠てその名を説くといえども、これを推究するときは、蓋し人間の賤丈夫より始まるならんか。……泰西絵画の根基はこれを卑近に取り、輒もすれば理想に拘束せられて、超然として蹊径を脱離して、物象の飄焉たる能はず。故に油絵の料を取るは、形以外に跼蹐して、建築の図案の如く、撮影の紙片〔写真〕の如く、一に形似を主として、幽遠杳渺、万物を融和渾成して、形似以上に達し、形似を以て論ずへからざるの神韻趣味沸々として絹素〔画布〕の表に生するものの、……自ら神霊の氣、……裸体に極まりて婦人に止まり、遂に滔滔たる賤丈夫をして垂涎十丈ならしむる所以にあらずや。

明治二十八年七月の『絵画叢誌』第一〇二巻に深田無光が同じ主旨でこう述べていた。

黒田某〔清輝〕が博覧会に出品せられたる裸体美人画は大に世の注意を惹きて、画の道に心得あるものも、門外漢も専門家も、思ひ思ひの意見を吐露すること、なれり。……ラファエル〔ラファエッロ〕、アンジエロ〔ミケランジェロ〕等が画の過半は赤裸の人物画に在り。社会の風俗人情は推移すれども、美術家の理想は古代に顧みる故に、裸体画の嗜好が歐洲を支配するは

当然の事に非ず、今日の日本画が印度支那の古代風俗に於ける如く、甚だしきは日本の風景を支那の画法にて画くが如く、裸体画といへば必ずその範を希臘羅馬に取り、しかも数千年前の風俗画たりしものは今は現在界のものとなりて、寸膚の蔽ふ無き裸体画も美はしき感情を以て歓迎せられ、美術家の心胆もこの好問題の上に練らるゝ事となれり。觀世音の聖像に娼婦の肖像を試むるの世なれば、天界の理想画に不潔分子を混ざるもの無きにしもあらず、今日歐洲の裸体中名を美術に仮りて頗る春画に類する汚臭を隠すものあり、絵画彫刻の最上とまで尊まるゝ裸体画中には觀るに忍びざる最下等のもの無きにしもあらず。然れどもこれ裸体画といふもの、悪しきに非ずして、その罪は画家に在り。

また当時、東京美術学ではヌード・モデルを写生させていた。ウイーン出身の演劇人アドルフ・フィッシャーが日本を訪れ、一九〇〇年に出版した『日本の芸術生活への旅』においてこう書いた。

全権を有する大臣〔西園寺公望〕の命には首脳部〔岡倉天心〕も抵抗し得ず、意に反して最終的には西洋画科は設置され……黒田はその目的のため、彼と同じ志を抱く何人かの親しい画家を召集した。……やはりラファエル・コラン門下の久米が担当で週二十時間木炭を手に古代ギリシア彫刻〔の石膏模型〕に向かっている。

……一年生のアトリエに隣接してより広いアトリエがあり、そこでもやはり木炭デッサンが、それも裸体デッサンが週二十四時間おこなわれる。この絵画クラスにおいて特に優れた成績を修めた学生には、暫時油絵具での制作が認められる。この学年は画家藤島の担当にあたるが、作品の添削は黒田が行う。三年生の過程の十六名の学生たちは週二十四時間油絵具による裸体画制作に勤しむ。しかし午後は好天であれば風景を描くため戸外に赴く。四年の最終学年においては学生は再度裸体画習作に取り組む。……別棟のアトリエでは十三名の青年たちが写生している。この者たちは一年を終了後、黒田ではなく、かつてのイタリア人教師フォンタネージの門下である浅井の下での研鑽を選んだ学生たちである。わずか数ヶ月奉職し、明らかに評価も高くない教師が選ばれるとは、西洋画科という組織の一体化を防ぎ、党派分裂を惹起し、そうして新しい方向性を弱体化するかのように思われる。

漱石は『猫』六において、物理学者の寒月に奇抜な舞台劇を考案させる。舞台中央に行水する裸体の女がいて、高浜虚子が薩摩餅をきて舞台に現れる。舞台には柳の木が立ててあり〔明らかに明治二十四年に尾崎紅葉がゾラの『作品』を手本に書いた『むき卵』の挿絵〕、そこに鴉が一匹とまっている。虚子は「行水の女にほれる鳥かな」と俳句を一句つくって終わりだという。苦沙弥が寒月〔モデル

は物理学者で教え子の寺田虎彦〕に、裸体の女を舞台につかえば警察が来るだろう、と問うと、寒月は美術学校の裸体モデルを使う方がいいのだと言う。これもまた東京美術学校での裸体モデルを揶揄しているし、行水の女は明らかに清輝の《裸体婦人図》の暗示である。このとき、薩摩餅りという設定もまた薩摩出身の清輝を暗示するとともに、当時の薩長閥への反感も反映している。その脈絡で銭湯の超人を考えると、銭湯の醜い裸の日本人の姿は、清輝が裸体画を描く根拠として述べた内容と関連している。清輝は、明治三十一年十一月から翌年にかけて東京大学教授外山正一の肖像画を東京美術学校で制作したとき、裸体画の目的は「健全ナル人体ヲ作リ以テ芸術ノ心髄トシ」と述べていた¹⁰。外山正一は明治二十三年の『日本絵画の将来』においても同趣旨の肉体改造を語っていたが、そのとき、カーライルの『英雄論』の論法を借りて英雄主義を鼓舞し、自分分はカーライルを日本に紹介した最初の日本人であることを自慢にしていた。外山正一が熱中したカーライルの『フランス革命史』にはこう書かれていた。

マールセーユの市役所は早くもこれ等決死の志士を募り、七月の五日を以て彼等に言った。「諸君進んで、暴君を討戮し玉へ」
 Marchez, abatez le Tyran. 彼等凄くも時に取って勇ましいマッシン
 ヨン Marchons (いざ進まん) を叫んで、滔々と行進を始めた。

……これ等マールセイユ人は、ただ漠然たる一団の猛士にして、眉には黒雲をあつめ、目には烈火をほとばしらし、炎天を冒して進行する、甚だ奇観であつた。彼等は絶大なる疑惑と恐怖の中に進行したが、自身の胸中には一点の疑團も無かつた。彼等は最も明確に信する所があつた。外部よりは歐洲列国が断固として圧迫し来り、内部よりは彼等が猛然として活動し出した。……この黒眉団の胸中に鬱勃たる思想をば、チルテイ然たる大佐ルウジェ・ド・リールこれを壮烈凄壮なる神韻に翻訳した、天下に名高いマールセイユ人の進行歌曲なるものがすなわちそれである、実にこれは開闢以来世に公にされた歌曲中最も壯絶快絶なるものであつた。一たびその音律に接する者は肉躍り血沸ざるは無かつた。全軍隊、全群集はその目に熱涙をた、へてこれを謡ひ、死をば鴻毛よりも軽んじ、暴君汚吏をばこれを憎む蛇蝎の如く、競ふてその肉を啖はんとしたり。

したがってカーライルの『フランス革命史』を読んでいて『猫』一で迷亭はこの本をギボンの著書だと偽る、フランス革命歌に感動して、大和魂の新体詩に翻案した。そして明治十五年に、山居士の号をつかつて、谷田部良吉、井上哲次郎たちと『新体詩抄』を發行した。外山の新体詩「抜刀隊」のさわりの部分はこうであつた。

皇国の風と武士の 天地容れざる朝敵ぞ

維新このかた廢れたる、古今無雙の英雄で
又世に出ずる身の譽、共に慄悍決死の土
刃の下に死ぬべきぞ、天の許さぬ反逆を
死ぬべき時は今なるぞ、榮えし例あらざるぞ
敵の亡ぶる夫迄は、進めや進め諸共に
玉ちる剣抜き連れて、死ぬる覚悟で進むべし

その身を護る靈の、君の為なり国の為

日本刀の今更に、假令ひ屍は朽ちぬとも

敵も身方も諸共に、名は芳しく後の世に

大和魂ある者の、武士と生まれた甲斐もなく

人に後れて恥かくな、卑怯者となそしられそ

進めや進め諸共に、進めや進め諸共に

死ぬる覚悟で進むべし、死ぬる覚悟で進むべし

その大和魂は日本の近代化のための伝統切斷理論である。本歌フランス革命歌は外敵の侵入への怒りであるが、「抜刀隊」は外国への進出を暗示するので、意味は逆転していた。これは酒宴のとき歌われるほど流行したので、子規は明治三十一年五月十二日の新聞『日本』掲載の「人々に答ふ」でこう述べた。

やや美文を解する者は、山居士の抜刀隊の歌を以て、粗雑鹵莽

取るに足らずとなす。しかも兵士が挺身肉薄敵城を乗り取らんとする時、彼らの勇気を鼓舞する者は、抜刀隊一曲の歌ならざるべからず。……もし文学的趣味を具有して、大喝采を博する者あらば、これを以て彼非文学的の作に代へんこと、けだし歌人の職務なるべし¹²。

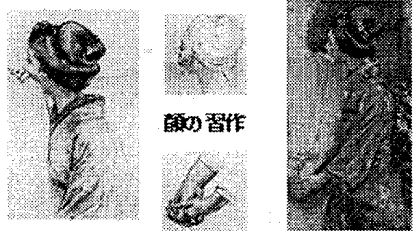
井上哲次郎のドイツ体験以来、日本人の体格が西洋人に劣ることが論じられ、明治二十八年五月に西園寺公望は第一次文部大臣として教育に「国力を強大ならしむるには壮健なる国民を造出するに在



《昔語り》の方眼いり模図画稿



《昔語り》のエポーシェ(油彩下絵)



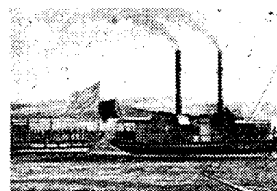
芸妓の髪習作 手の習作 芸妓のエポーシェ

り」として体育教育の充実とともに、「大和魂を唱ふるのみにして世界文明の大勢に伴随するを語らざる如きは余の取らざる所」と師範学校長に語り¹³、英語教育の充実をはかり土佐日記、徒然草などの国文学の授業を減らすように師範学校校長に官邸で説諭したが、

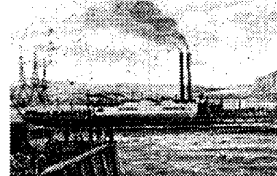
そのとき西園寺は「大和魂」というものでは役に立たぬ趣旨を述べ、問題を惹起した¹⁴。西園寺公望は明治二十八年の第四回内閣勸業博覧会で問題になった清輝の裸体画《朝妝》を弟の住友吉左衛門（友純）に購入させただけでなく¹⁵、明治二十九年には清輝を東京美術学校の西洋美術の教官に任官させ、清輝の念願の大作《昔語り》を描かせるために住友吉左衛門に制作費をださせた。したがって、その絵には大和魂を描く意図などはなかった。その絵は、フランスの第三共和制の理念を結実させたピユヴィス・ド・シャヴァンヌの絵画《ソロボンヌの寓意》や《自然と芸術の間》に見合った大作が予定されていて、日本における西園寺公望の国際性と共和制的思想を反映させるものであっただろう。

革命とモーセの超人

漱石の小説に登場する超人思想の系譜をさぐるために歴史をさかのぼろう。一八〇七年に画家フルトンが蒸気船を発明し、リヴィングストンとフルトンが共同出資運搬会社をたちあげたときから、蒸気汽船の時代が到来し、世界は狭くなる。この運送業の競争は美術の公告目的と美術コレクターをつくり、アメリカ合衆国での美術活動を盛んにしていく。そしてこのような画家サムエル・モース（「モールズ」）が一八三二年に電信機をヨーロッパからの帰途の船中で発



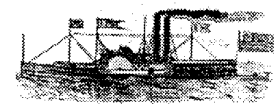
アルバーニ号、1825年頃
『ニューボート新報』石版



北米号、1825年頃
『ニューボート新報』石版

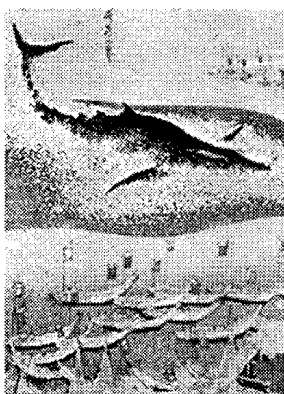


1836年の蒸気汽船、『テムズ・スワン・ウッドコック新聞』



リチャード・H・ピース
『アルバーニ号』1840-44年
Cf Art Bulletin, Sept. 2000,
LXXXII, No. 3

明するのである。紅茶を飲む習慣が広まっていたイギリスでは、一八四一年に中国茶の輸入で赤字に転じていた。しかし門戸をとぎした中国との自由貿易ができず、イギリスはインド産アヘンを中国に流し、中国がアヘンを摘発したので、それを口実に宣戦布告して、蒸気艦船「メーシス号」〔本頁図版参照〕を派遣し、中国ジャンク船



北高(前北高為一)『五島鯨突』
『千絵の海』天保年間(1834年頃)



『ジャンク船を攻撃する蒸気
艦船メーシス号』
アヘン戦争、1842年

を砲撃しただけでなく、沿岸諸都市を襲わせ、一八四二年には南京条約で香港を割譲させ、五港を開かせた。

七十歳代になった北斎(前北斎為一)は天保年間に捕鯨を浮世絵の主題にしていた(「本頁図版参照」)。鯨は日本人には蛋白源だが、アメリカでは街灯に使用されたので、捕鯨業が盛んになっていた。『白

鯨』の著者メルヴィルもこの頃、捕鯨船にのって日本近海まで来た。一八四一年、メルヴィルはマサチューセッツ州のフェアヘイヴンから捕鯨船アークシユネット号で出発し、ホーン岬を越えて太平洋に出るが、マーケサス諸島でその船を脱出してオーストラリアの捕鯨船にでタヒチに向う。そして反乱に加担し、フリゲート艦の二等水兵になり、一八四三年にリオデジャネイロ経由でボストンに帰り、除隊してランシングバードに戻る。この頃、アメリカの捕鯨船とアメリカ合衆国は、エイハブ船長のような執念深さで、鯨だけでなく、貿易船の寄港地も求めて世界各地を彷徨していたのである。

十九世紀中頃、オーストリアの支配下にあったイタリアでは独立運動が起こる。プロシアはオーストリア併合を期して、産業革命に乗り出した。フランスでは革命への反動が起きて、ナポレオン三世がイタリアへの野心を見せ、オーストリアやプロシアとの戦争を決意し、市場と原料を求めてイギリスやスペインの植民主義に対する野心を示す。サルディニア王国宰相のカヴールは、革命児ガリバルディを牽制しながらイタリア統一を狙いだす。イギリスはフランスやプロシアの勢力拡大を牽制する。ヨーロッパは列強の闘争と産業開発によって博覧会の闘争を開始していた。イギリスは中国茶の輸入超過を挽回すべくインドで栽培したアヘンを中国に持ち込み、アヘン戦争を起こして清王朝を植民地化しはじめた。

イギリスがアジアへ進出していた頃、ラスキンは『近代画家論』を出版し、第二巻を一八四六年に出版したとき、第二節第五章を「超人的理想」Of the Superhuman Ideal という題目にしていた¹⁶。ラスキンは「超人間の存在が人間の感覚に感じられると考えられる四つの様式」を旧約聖書最初の預言者モーセ、そしてエリア、アブラハム、エゼキエル、使途の前に蘇るキリストに求めた。

第一は、外的なタイプや兆候や影響力によって草むらの焰としてモーセに現れたり、また、ホーレブ。山中の声としてエリアに現れた。

第二は、本来その超人的存在の属性でない形態をとることによって現れる。例えば、鳩の形態の聖霊や、子羊の形態の三位一体の第一人格のようにである三位一体の第一人格の天使や他の形態の姿をまとつての現われ方——アブラハムやモーセやエゼキエルに対して現れたような場合——もこれに当たる。

第三は、その存在の本来の属性であるが、いつも目に見えない形態の現われ方による。例えば、扉が閉められた時に、使途達にキリストが蘇って現れたように。

第四は、その存在が——モーセの顔の輝きのように——影響を与え、靈感を吹き込む人間形態に及ぼすその作用による。

このように述べて、ラスキンは、超人的表現には、金や銀の火焰

〔後光〕を用いたり、形態の代わりに光と影、雲や水蒸気として表したり、あるいは肉体の傷〔聖痕〕を示したり、天使の翼のように二つの肉体を接合させることで行われるが、月並みで俗っぽくとも、「神の偉大な手にかかれば、効果的になる」という。ここでヴァティカンのシステイーナ礼拝堂側壁にあるサンドロ・ボッティチェッリの《十戒板を示すモーセ》〔本頁図版参照〕を見ておこう。モーセはシナイ山で神から十戒板をもらって下山し、待っていた者たちに見せると、それを見た人はモーセの頭から出る神の威光で目が見えなくなった。それで顔を手で覆う人が描かれている。旧約聖書によれば、モーセには顔覆いをかけられたという。ボッティチェッリはモーセの頭部に金の後光を描いているが、ミケランジェロは彫刻《モーセ》において



ボッティチェッリ《十戒の授与》部分、1483年頃、ヴァティカン、システイーナ礼拝堂



ジョヴァンニ・ダヴッド《十戒を説明するモーセ》部分、1775年、ローマ、サン・ルカ・アカデミー美術館(トレビの泉の近く)

族長のかぶと兜にみられるような角を表現している。このように神の威光を示すために漫画的表現がとられたが、ラスキンはそのようなものを超人的なものともみなしている。これらの説明のためにラスキンは、ピサのベノッツォ・ゴッツォリの壁画における天使の表現を示し

たり、レオナルドやフラ・アンジェリコの例、そしてミケランジェロの例を示す。とくにラスキンはミケランジェロの彫刻を非難さえしてこう述べる。完全な身体美に必要な筋肉の発達を描写できるが、力持ちのヘラクレスの身体形態は精神的ではない。精神的生き物の能力は無形であり不変で、運動に依存しないので、解剖図的表現は隠すがいい。ミケランジェロの解剖知識も彼の神性を妨害するので、裸体はできるだけ隠す方がよい、と述べる。

ラスキンは裸体美術、とくにミケランジェロの筋肉質の彫刻を忌み嫌うが、それでも、モーセの顔の輝きのように、靈感を吹き込む人間形態」について書き、ヴァザーリがミケランジェロの《モーセ》に与えた説明を暗示することで、逆説的にミケランジェロの《モーセ》に超人的なものを認めさせる根拠を与えている。ヴァザーリは『ミケランジェロ伝』においてモーセの神性を隠す顔の覆いについて語ったが、一七七五年にジョヴァンニ・ダヴィッドは《十戒を説明するモーセ》を描いたとき、実際に顔覆いを描いていたのである。このあとジョヴァンニはフランス、イギリス、オランダで素描の普及活動をしている。

不況と革命

一八四五年の夏、フランスではジャガイモが不作で、四六年の小麦・ライ麦不作による食料不足に加えて、イギリスでの恐慌が追い

討ちをかけた。製鉄、繊維業界の生産は三十パーセントまでに落ち込み、商工業の危機を迎えた。こうしてルイ・フリッパのブルジョワ王政は民衆の支持を失い、この状況の打破策として一層の植民地獲得へ動き出し、一八四七年十二月、モロッコのスルタンを降伏させた。ロマン派画家ウジェーヌ・フロマンタン（一八二〇—一八七六）は一八四六年以来、数度アルジェリアを旅行し、サロンに一八四七年以来、オリエンタリズムの絵を出品し好評であった。

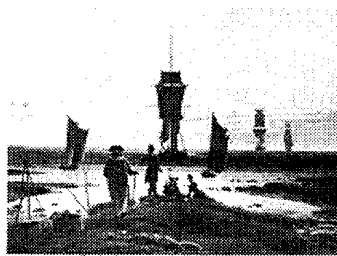
一八四七年十二月、ロシアの革命家バクーニンはフランスのギゾー内閣の要請をいれたロシア公使によってパリから追放されてブリュッセルに移り、ポーランド民族問題に取り組んでいた。フランスでは一八四八年二月に二月革命が起ったのでパリに戻り、革命に没頭して、「革命は始まったばかりで、全ヨーロッパに広がるだろう」と書く。ヴィクトル・ユゴーは革命に参加し、六月五月の補充選挙によってパリ選出議員になる。そしてユゴーの關係する『エヴェンヌマン新聞』はルイ・ナポレオン・ボナパルトを共和国大統領候補として推した。フランスの支配者ルイ・フリッパが亡命して革命は成功する。フランスでの革命はドイツにも飛び火した。まずバイエルンの首都ミュンヘンで始まり、ベルリンとウイーンと三月革命が起きたので、ロシア人バクーニンはロシア人とポーランド人に働きかけるためにロシアの国境に向い、プラハでの全スラヴ民族会議で外交委員会のメン

バーになり、当地での反乱に加担したが鎮圧される。ドイツの民衆はドイツの統一と自由をプロイセン国王に認めさせ、反動の元首メッテルニヒがイギリスへ逃亡し、ウイーンで皇帝は軍隊を撤去させ、市民、労働者、学生からなる国民防衛軍に支配をまかせ、憲法制定を認めた。革命前夜に帰国していたマルクスはエンゲルスとケルンで『新ライン新聞』を発行して革命を指導した。しかしフランクフルトの国民議会がプロイセンの圧力でプロイセンとオーストリアの軍隊で民衆を抑えて、民衆から見放された。ウイーンでは六万の軍隊に革命軍は陥落し、プロイセン軍もまたこれに呼応した。

フランスの臨時政府は、二十一歳以上の男子に選挙権を与えた結果、有権者は七月革命のときの二十五万人から九百万人に増大し、皮肉にも地方の司祭や地方名士の力を増長させて急進的な革命政府は危機にたつた。六月には暴動が起き、パリにはバリケートが敷かれ、ヴィクトル・ユゴーも参加する。議会は共和派將軍のウジェーヌ・カヴェニャックを行政長官に置いた。彼は前年にアルジェリアを制圧したことで有名であった。こうして反動勢力が新しい選挙法のもとで伸張し、サン・シモン主義をとるルイ・ナポレオンが復帰して大統領に就任した。

一八四九年三月、バクーニンがドレスデンの指揮者アウグスト・レッケルの家を訪れ、ワーグナーと親しくなり、彼の自宅に泊まつ

た。バクーニンはポーランド反乱記念集会演説によって全ドイツで知られていた。五月、ドレスデンでは革命の後退に対して民衆が立ち上がると、ザクセン国王はプロイセンへ援軍を依頼した。革命軍は兵器庫を襲い、市街戦になった。革命軍の中には、「ローエングリン」を完成させたばかりのドレスデン劇場の楽長リヒャルト・ワーグナー（一八一三—一八八三）、そしてバクーニンを中心にして、指揮者レッケル、オペラ歌手デフリートン、画家ヴィルヘルム・ハイネ（一八二七—一八八五）、建築家ゼンパーがいた。ハイネはドレスデンの王立芸術アカデミーで画家志望から建築学に移り、それを修了してから舞台装置画に変わった。この過程においてハイネはフリードリッヒのドイツ・ロマン主義的風景画（本頁図版参照）に影響されて



カスパー・ダヴィド・フリードリッヒ
《人生の転機》1818年以降



ヨーハン・クリスティアン・ダール
《月光のダーリッック港》1839年、
オスロ国立美術館



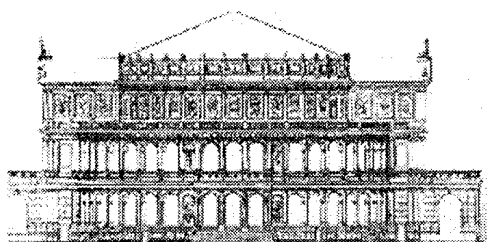
クリスティアン・ダール《海辺の母子》
1840年、バーミンガム海洋美術館

ドレスデン王立芸術アカデミーの教授になったノールウエーの画家ダールの風景画（本頁図版参照）を学んでいたに違いない。ハイネはアカデミーの特別奨学金で三年間パリ留学した。帰国後はドレス

「エンゲリン」初演をワイマールでおこなった。ハイネはアメリカ

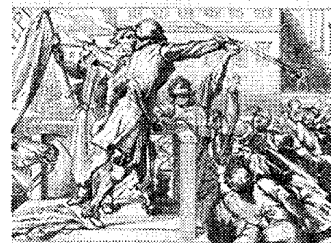


ゴットフリート・ゼンパーの肖像
写真からの木版、1866年



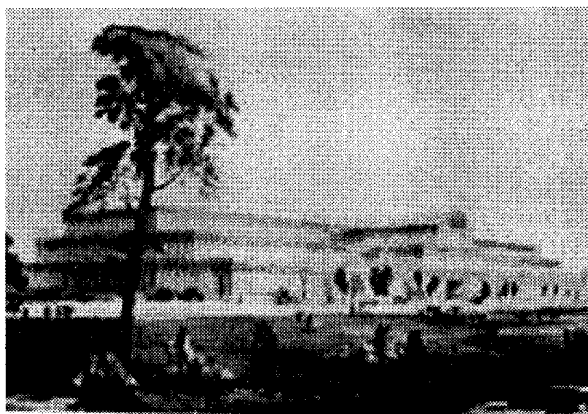
ゼンパー《旧ドレスデン王立劇場》
1838—41年 1869年に消失

デン劇場の舞台画の仕事をしてワーグナーのもとで働いた。
無政府主義者バクーニンの指揮で宮殿を襲ったとき、ワーグナー
とハイネは逃亡し、ワーグナーはワイマールのリストを頼り、リス
トの支援でゲーテ生誕百年祭のときドレスデンで完成していた「ロ

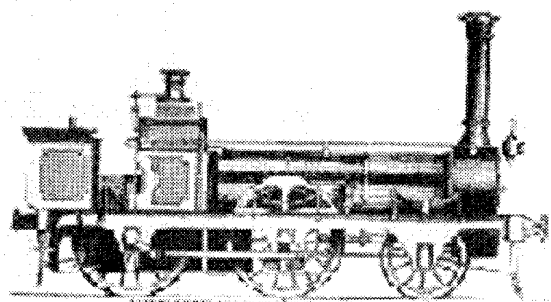


アルフレート・レーテル
《一八四八年の死の舞踏》シリーズ、
1849年

で回避すべく一八五一年にロンドン大博覧会を企画していた。この年



デッキンソン《ヨセフ・バクストン設計の水晶宮》1851年



第一回ロンドン大博覧会に出品された蒸気機関車

に逃亡し、アメリカ奥地の探検を政府から依頼され、土着民が日本
から来たという話に関心をもち、さらに南米の調査にかけた。
ドイツの版画家アルフレート・レーテルには当時の革命家は死神
に見えたので、一八四九年に《一八四八年の死の舞踏》シリーズ
〔本頁図版〕をゲオルク・ヴィラント社から出版した。死神が馬にの
つて都市に現れ、民衆を扇動して死の狂乱に誘い出す。この死神は
画家にとってバクーニンを意味していたのではないだろうか。
ゼンパー〔本頁図版参照〕は一八四九年にパリへ逃亡し、一八五
一年にはロンドンに移住した。イギリスは革命の余波をお祭り騒ぎ

にドーバーとカレーの間に海底電線が敷設されている。ゼンパーは展覧会企画者たちと接触してカナダ、エジプト、スウェーデン、デンマークの各館の整備に参加した。経済的繁栄の大芝居は世界の目をひきつけ、革命から秩序と繁栄へと歴史の流れを転換することに成功した。ロンドン大博覧会〔のちに万国博覧会と呼ばれる〕はなによりも橋梁建築家ブルネイがたずさわった鉄骨とガラス張りの水晶宮〔前頁図版参照〕と、蒸気機関車〔前頁図版参照〕、動力紡績機、水圧式印刷機、脱穀用エンジンなどの科学技術の展示で世界を驚かせ、これらの世界が産業立国であることを示した。同年にゼンパーは『建築の四要素』(Die vier Elemente der Baukunst)を書き、この中でロマネスク、ゴシックの次の時代を「産業様式」という用語を用いた。

フランスでは二月革命によって被選挙人が増大した。この革命のとき、画家ミレーは『平等・兄弟愛・共和国』〔本頁図版参照〕を描こうとしていたが、選挙の結果、保守的政治に逆行したために、制作を断念し、バルビゾンに移り、労働者の生活を描きだした。この選挙制度の改革は、美術行政にも波及した。サロンは優秀な作品を求めて制作期間をのばすために隔年開催になり、作家三点出品が決定された。この頃はアカデミー・シュイスなど私塾が流行し、美術の基礎訓練を教え、国立美術学校は競技試験をするだけになっていった。フランスにおいて趣味の大きな変化が生じた第二段階の

妥協時代の要因は、万国博覧会の開催と公共建築ラッシュである。



ミレー《平等・兄弟愛・共和国》
の下絵、1848年



ミレー《鋸を換く人》1851

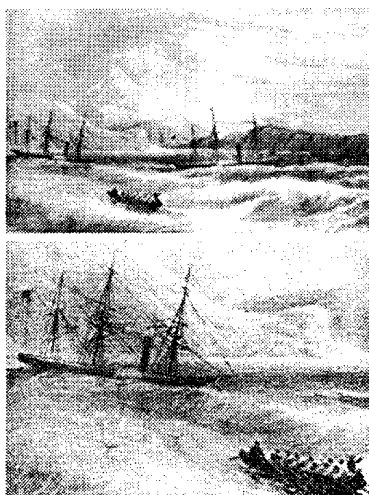


ミレー《落穂拾い》1857年

ヤーコプ・ブルクハルトは一八四六年からベルリンとイタリアで研究し、三十歳になった一八四八年、バーゼル大学の非常勤歴史講師に復帰するとともにバーゼルの高等学校の歴史教師も勤めた。ブルクハルトによれば、当時のヨーロッパで、反動が起り、一八四八年の十月と十一月にはウイーンとベルリンで、一八四九年にはロシア人の助力によってハンガリーで勝利を収めた。社会主義は敗北から立ち直ったかに見え、一八五一年十二月に大統領は議会にクーデターを決行し、国民投票で任期を延ばし、一八五二年五月の選挙での勝利を確信していた。フランスは新しい憂慮に包まれていたが、この危機は、一八五二年十二月のクーデター、正確にはクーデター記念日に、ルイ・ナポレオンは皇帝ナポレオン三世となり第二帝政が開始した。大多数の国では、王家や官僚政治や軍国主義が存続し、精神的人間の内面的な危機は殆ど放任された。新聞雑誌や、法外に

拡張する鉄道や蒸気汽船による交通は、到る所で強力になり、(営利と絡んだ産業は世界産業に参加しようと努める。

プロイセンでは革命のあおりで一八四九年に二院制の議会を発足させ、一八五〇年一月には欽定憲法を保持し、立憲国家になった。この議会を通してビスマルクという政治家を登場させる。このころから経済的繁栄が続き、鉄道網が飛躍的にのび、鉄と石炭の時代に突入し、ドイツ関税同盟はハンノヴァーの租税同盟も吸収し、三五



ハイネ《小田原の入り江》、
ペリー『日本遠征記』より



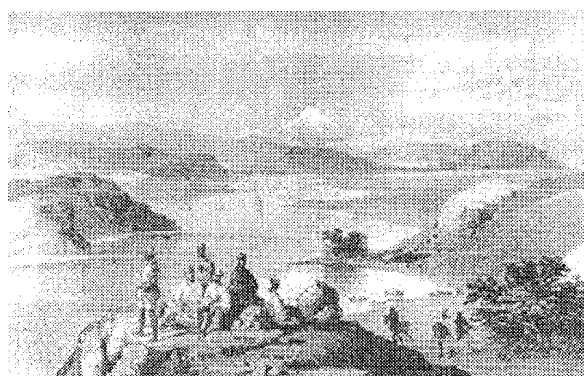
ヴァイルヘルム・ハイネ
シュレーパー『プロシア日本遠征記』より

〇〇万人の大同盟になった。

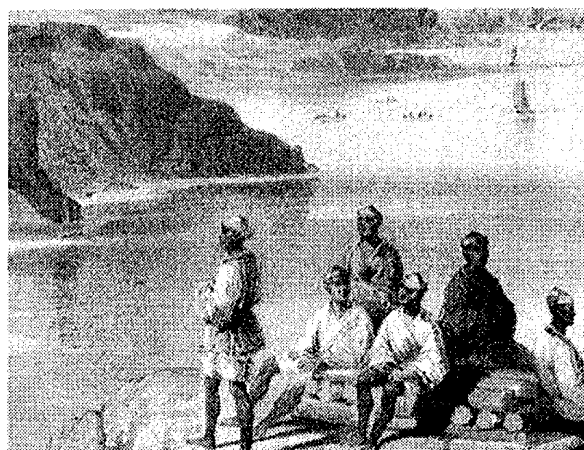
貧しい中国人たちはアメリカ合衆国へと移民をはじめ、大陸横断鉄道労働者になっていった。一八五二年、イギリスの運送船は中国人を石垣島で虐殺している。

画家のハイネは新開地のアメリカにわたり、政府の調査員としてインディアンの土地をめぐり、南米の調査をしたのち、インディアンの

渡来地という日本に行きたくなかった。アメリカ合衆国はペリーが率いる蒸気艦船の威力でメキシコを抑えたのち、捕鯨船の寄港地を求めて、日本に開国を迫るためにペリーの遠征隊を計画した。シーボルトは乗船を懇願したが、ロシアのスパイである恐れがあり、ペリーは拒絶した。南米の情報を大統領に渡した画家ハイネは「本頁図版」、大統領に頼み、ペリーの黒船に乗り、一八五三年に浦賀に到着した。米国最初の蒸気艦船は大砲で威嚇した。



ヴァイルヘルム・ハイネ《ウエブスター島からの眺め、江戸湾》
『ペリー日本遠征記』図版 1856年



画家ハイネはペリーの調査を補助するとともに、沖縄や日本の各地をドイツ・ロマン主義者の風景画の視点でスケッチしていき、それらはペリーの『日本遠征記』の石版画のための下絵になった。ハ

イネの風景画には蒸気汽船が波に翻弄される光景〔前頁図版〕や、静かな湾に停泊している様、そして日本の共同浴場、小型蒸気機関車の展示風景など、さまざまであるが、風景画として興味深いのは《ウエブスター島からの眺め、江戸湾》〔前頁図版〕である。その絵は、船員の墓地をつくるために訪れた島から江戸湾を眺望する光景であり、富士山がかなたに見えている。興味深いことに、墓地をつくりに行つた船員たちが休息をとりながら、眺めを楽しんでいる。このように風景を眺める人を描く手法はフランスの画家ユベ



ユベール・ロベール(1733-1808)
《パリ近郊の壮大な風景》1781年、個人蔵



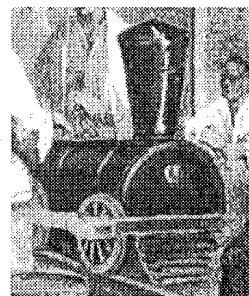
画狂人北斎《秋築山春景》享保年間(1801-03)



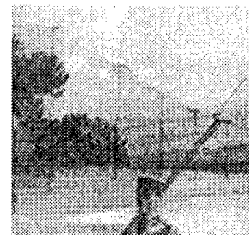
ール・ロベールに見られるとともに、ドイツではフリードリッヒやその弟子のダールがさらに売れるロマンチックな風景画として展開して、ハイネの江戸湾風景もまた風景にみとれる系列の一枚である。一八〇三年頃の北斎の浮世絵にもこの景観が浸透していた。



日本人が描いた小型蒸気機関車



《1854年3月13日、贈り物の引渡し》における小型蒸気機関車



《1854年3月13日、贈り物の引渡し》における通信電線

ペリーは一八五四年、再度江戸湾を訪れて、日米和親条約を締結して鎖国を解かせ、そして小型蒸気機関車と電信機〔本頁図版〕を江戸幕府に献上した。こうして日本もまた産業革命の時代に突入した。

万国博覧会と超人的《モーセ》

一八五五年にフランスのナポレオン三世はサン・シモンの思想のもとで第一回パリ万国博覧会を開催し、蒸気機関車を会場で動かした。クールベは博覧会出品を拒絶されたために、会場の外に個展小屋をつくり、《埋葬》とともに巨大な《画家のアトリエ》を展示した。その中には友人で無政府主義者プルードン、作家のボードレールを善き人として右側に描き、ナポレオン三世、バクーニン、ガリヴァルディたちを悪しき人として左側に描き、中央には美の女神ヴィーナスと木靴の貧しき少年の間で故郷オルナンの風景を描く自分を配置した。貧しき少年は貧窮の神とヴィーナスの間に生まれた

キューピッドを意味していたので、クールベはプラトン哲学に基づいて理想を表現する画家を任じていた。

一八五五年、ブルクハルトは大著イタリア美術案内書『チチエロ―ネ』（Cicerone）を出版し、「ルネサンス」という用語を完全に歴史概念として使用し、定着させた。「ルネサンス、その独自性と時期」においてこう書く。

我々は独自のルネサンスを二つ時代に区分できる。最初のルネサンスはほぼ一四二〇―一五〇〇年に及び、探求の時代として特徴づけることができる。第二の期間は一五四〇年にまでは行き着かないだろう。その時期は現代建築の黄金時代であり、建築はその最大の課題として主要形態とその限界で示される装飾



ミケランジェロ《モーセ》
ユリウス二世墓碑、1513―16年、ローマ、
サン・ピエトロ・イン・ヴィンコリ聖堂

との決定的な調和に達する。一五四〇年からはバロックの予兆

の様式がはじまる¹⁸⁾。

こうしてブルクハルトで完成するルネサンスの建築概念が確定した。さらにミケランジェロの彫刻《モーセ》〔図版左〕について形容詞「超人的」を冠した。

《モーセ》は黄金の牛の像の礼拝を見てそれに話しかける瞬間が表現されているように見える。その形態のなかに、人がただ慄き期待するような、モーセに付与された物理的力によって強烈な動勢への移行は生き生きしている。その両腕と両手は、現実にはそうは見えないのだが、ある仕方で高められて、これらの部分の特徴的な生命を見せる点で実に超人的造形に満ちている¹⁹⁾。

この本でミケランジェロの彫刻に「超人的（übermenschlich）なものがある」と書いた。超人的という言葉の根拠は、ヴァザリが一五六八年に書いた『ミケランジェロ伝』増補再版の最後に見られる。ヴァザリは「ミケランジェロ墓碑」の全容を説明したとき、「超人的な」という用語でミケランジェロを称えていた。

画家ベルナルド・ティマンテ・ブオンタレンティが、すぐれた創意をもって、世界の主要三部分の川を描いた。……その川とは、ナイル川、ガンジス川、ポール川である。……これらの川は、高く舞い上がるかに見える「名声」に導かれてトスカーナに入

り、アルノ川の周りにやってきた。……ミケランジェロの魂が天の至福に至ったことを示すべく、巧妙な画家は大氣中に天の光を表す光輝を描いた。その光に向かつて、小天使の形をした祝福された魂が、次の叙情的な詩句を抱えて進んでいた。

我、世に生きながらも、賞賛に包まれて、天へと向かう。

両側の二つの台座には、中に前記の川、ミケランジェロの魂、「名声」が描かれていると思われる幕を開こうとする仕草をした二人物がいた。……ウルカヌスを表す川の右側にいる人物像は手に松明を持ち、彼の足元で首を持つ人物像は「憎悪」を表し、窮屈そうである。下からはい出ようとして苦勞しつつ、そのしるしとして次の詩句を持つ禿鷹を伴っていた。

苛酷な憎悪よ、なぜ急いで起きあがろうとするのか？

じつとしていよ。

なぜなら、超人的で半ば神のごときものは、どのようであれ、憎まれも羨まれもすべきではないからである [E questo perché cose sopr'umane e quasi divine non deono in alcun modo essere nè odiate nè invidiate]。他の人物像は「喜び」として作られ、三美神の一人でウルカヌスの妻であり、「比例」を表し、手には百合をもっていた²⁰。

このようにヴァザリはミケランジェロを「超人的で半ば神のご

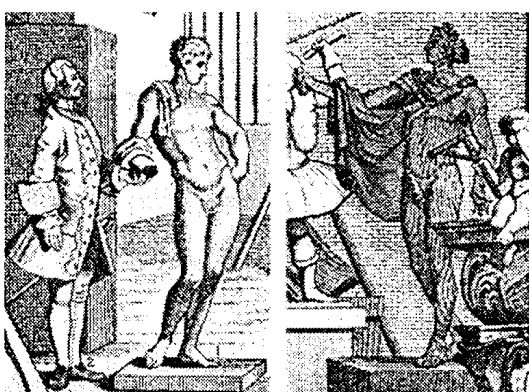
ときもの」と把握していた。ヴァザリはミケランジェロの《最後の審判》についてミケランジェロを賛美せよと神のごときミケランジェロのための讚美歌を書いた。このことがミケランジェロを超人的、すなわち「super human」として理解させる契機になった。しかしヴァザリは《モーセ》に関して「超人的」と述べたわけではなく、その手をこう表現していた。

筋肉質の腕や、骨や神経まで見える手など、見事な美しさと完璧さをそなえている。

このように「完璧さ」と表現し、また神性を現しているとも述べている。超人的想そのものではないが、イギリスの画家ウィリアム・ホガースは一七五三年の『美の分析』The Analysis of Beauty の図版を添付してヴァティカン宮殿のベルヴェデーレ〔展望台〕にあったアポロン像には「人間的なもの以上」something more than humanのものがある、という書き方をしていた。ドイツのレッシンは一七六六年の著書『ラオコーン』二十二章において『美の分析』の説明を引用してこう述べていた。

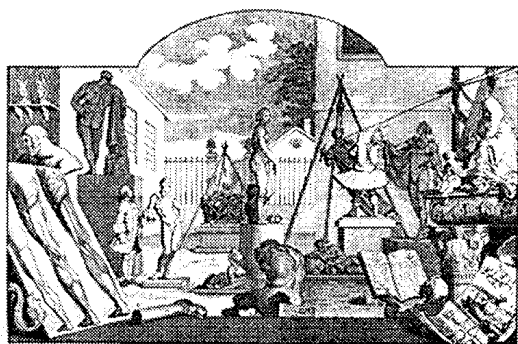
ホガースがベルヴェデーレのアポロン〔図版上の右〕について言っていることを思い出したい。彼はこう言っている、「このアポロンとアンティノオスとは、いずれもローマの同じ宮殿内にある。しかしアンティノオスが、見る人を奇異

の念で満たすとすれば、アポロンは見る人を驚嘆させる。しかもそれは、旅行者たちの言によれば、一般に彼らにはとても表現できないにか人間を越えたものがそこに見られるからである。しかしよく見ると、この作の均斉のとれていないところが、誰の目にも明らかになってくるだけに、この効果にはいよいよ驚嘆すべきものがある。わがイギリスの第一流の彫刻家の一人で、最近この彫像を見るためにローマに旅行した人は、いま私が言ったことを裏書してくれたが、特に、足と股が上体にくらべると長すぎるし太すぎると言った。また、イタリア最大の画



古代彫刻アンテイノス

ベルヴェデーレのアポロン



ホガース『美の分析』1753年出版の図解

家の一人アンドレアス・サツキも同意見だったらしい。さもないければ彼は（現在イギリスにある有名な絵において）、音楽家

パスクアリーニにたいして月桂冠を授けるアポロンに、アンテナオスの完全な釣合を与えることはしなかったであろう。というのは、ほかの点ではこれはあのアポロンの全く模写らしく見えるからである。非常に立派な作品でも、あまり重要でない部分は粗末に扱われているのは、よく見られるところであるが、しかしこの場合はそうではない。なぜなら、美しい彫像では正しい比例はその本質的な美の一つだからである。それゆえにこの脚部は、わざと長くされたものに相違ないという推定が生まれてくる。さもなければ、こういう不釣合は容易に避けることができたであろう。だからこの像のもろもろの美しさを徹底的に検討してみるならば、これまでわれわれがこれを全体として眺めたとき、言いようもなく立派だと考えたところのものが、実はその像の一部分における欠点だと思われたものから出ていると判断する理由があるのである。——いちいちまことにもつともである。蛇足を加えるならば、すでにホメロスはそれを感じていて、足や股の寸法をすこし大きくするだけで崇高なおもむきが生まれてくることを暗示している。なぜなら、アンテナルがオデュッセウスの姿をメネラオスの姿とくらべてみようとするとき、ホメロスは（『イリアド』v.210.211.で）アンテナルにこう言わせているからである。

立てばメネラオスが肩幅ひろくめきとび、

坐ればオデュッセウスの方が堂々としていた。²¹⁾

この部分におけるホガースのくだりは、英語では、*書かれてゐる*。

These two masterpieces of art, are seen together in the same palace at Rome, where the Antinous fills the spectator with admiration only, while the Apollo strikes him with surprise, and, as travelers express themselves, with an appearance of something more than human; which they of course are always at a loss to describe: and this effect, they say, is the more astonishing, as, upon examination, its disproportion is evident even to a common eye. One of the best sculptors we have in England, who lately went to see them, confirmed to me what has been now said, particularly as to the legs and things being too long, and too large for the upper parts.²²⁾

ドイツ語では、*書かれてゐる*。

Ich will noch ein Beispiel dieser Art anführen, welches mich allezeit sehr vergnügt hat. Man erinnere sich, was Hogarthüber den Apollo zu Belvedere anmerkt [Zergliederung der Schönheit, S. 47, Berl. Ausg.-L.]. 'Deser Apollo', sagt er, 'und der Antinous sind beide in eben

denselben Palaste zu Rom zu sehen. Wenn aber Antinous den Zuschauer mit Verwunderung erfüllet, so setzet ihn der Apollo in Erstaunen: und zwar, wie sich die Reisenden ausdrücken, durch einen Anblick, welcher etwas mehr als Menschliches zeigt, welches sie gemeinlich gar nicht zu beschreiben im Stande sind.²³⁾

要するに、ホガースのいう「人間を超えたもの」とは身体表現における両脚、両手の不均衡である。ミケランジェロの彫刻作品を検討すると、脚の長さにも矛盾が生ずるので、ミケランジェロも「人間を超えた」芸術家になるだろう。

一八五七年、ヨセフ・アントン・コッホ（チロル一七六八—ローマー一八三九）は、一八四二年からローマの伯爵カルロ・マッシモ（一七六六—一八二七）からドイツのコレネリウスたち若い芸術家たちに委嘱されたマッシモ亭宅（カシノ）ダントの《詩の最初》を完成させた。その絵ではダンテが三匹の獣に出遭う場面であり、ライオン、豹、狼があまりにも写実的にえがかれているために、ダンテの『神曲』における恐怖感とはそれほど強烈ではない。²⁴⁾ パルマ、パラティーナ図書館にあるフランチェスコ・スカラムツァ作の《ダンテに説諭するウェルギリウス》は（地獄篇第三歌からとられた作品であり、一八四二年から五七年のあいだに制作されている。そこではウェル

ギリウスは桂冠をいただく姿の、亡霊だとは思われない若者であり、ベアトリーチェと逢うための地獄行きをダンテに勧めている。いずれの作品でも、十九世紀がダンテ再生の時代であったことを証明している。

一八六〇年、ガリヴァルディは百人の赤シャツ隊とシシリーに上陸し、ラグーザなど当地の若者たちに支持され、軍隊をナーポリに進め、ローマに迫ったとき、フランス勢力のローマを恐れたヴット



J・アントン・コッホ《森で眠るダンテ、三獣の攻撃、ウエギリウスとの邂逅》1825年、ロッテルダム



フランチェスコ・スカモツツァ《ダンテに説諭するウエギリウス》1842—57年、バルマ、パラティーナ美術館



ヨーハン・アントン・ランボウ《地獄の門の前のダンテとウエギリウス》1827—32年、フランクフルト市立西画館

リオ・エマヌエル二世の軍隊にとめられ、占領地を無償で贈呈した。この年に四十二歳のブルクハルトは今後の世界状況を分析するために、ルネサンスの状況でシミュレーションしようとして、かつての

動乱期ルネサンスの諸事象をテーマ毎に分類した名著『イタリア・ルネサンスの文化』を出版し、フランス語の「ルネサンス」を本題にした。ルネサンスに現れた非宗教性は、十九世紀の産業革命によって加速され、世俗化をもたらす。そのとき工業化された都会人たちは風景画の趣味を見出していた。ブルクハルトはルネサンスを「世界と人間の発見」と要約し、ダンテの『神曲』に始まる「風景の発見」について記す。ペリー来航以後、ヨーロッパは日本との和親条約をむすびだした。

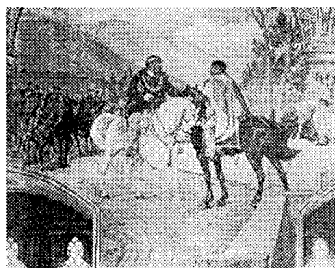
アメリカ合衆国（駐日大使ハリス、一八五五年）、

オランダ（ドンケル・クルティウスが一八五六年）

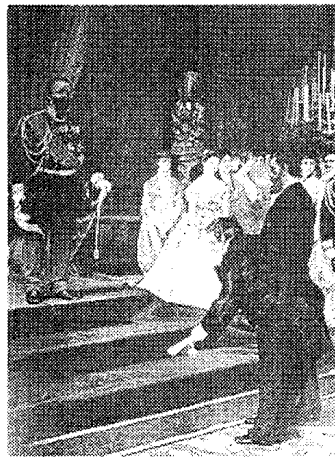
フランス（グロ男爵が一八五八年）、

イギリス（エルジン卿が一八五八年、オールコックが一八五九年）、

プロシア（オイレンブルク伯爵が一八六一年）、



ピエトロ・アルディ《1860年8月、テアーノでのエマヌエル二世とガリバルディの出会い》1880年代



マッカーリ《1870年8月、ローマの国民会議におけるエマヌエル二世》1880年代 シェナ市役所

日本の横浜には外国人の居留地に外国の商館が建設され、オランダ人フーファナーゲルが建てたホテルが建てられ、一八六一年七月三十日にアメリカ人資格のヴィルヘルム・ハイネがドイツ砲艦に便乗して長崎から到着し、そのホテルに同宿した。ハイネはペリー艦隊勤務ののち故国ドイツに戻り、アレクサンダー・フォン・フンボルトに会いにいったが、フンボルトはその日に亡くなった。葬儀に参列後、南ドイツ、スイス、南フランスを経て、地中海のマルタ島に渡り、北アフリカを回り、それからフランス・オーストリア戦争の戦禍の残るイタリアを経て、ドイツに戻り、それからプロイセン政府が企画した東アジア遠征にスケッチ画家として参加するように要請された。そしてオイレンブルク伯爵とともに一八六一年に来日した。日本での交渉から帰国の途中の上海でオイレンブルクと衝突して、シベリア経由で帰ると述べて離脱し、日本に戻ると、奇しくもホテルでシベリア流刑から逃亡した革命家バクーニンに出会い、共にサンフランシスコに渡った。その後、このホテルにシーボルト父子が泊まり、ハイネとバクーニンのことを日記に書いた。

一八六一年にフィレンツェを首都としてヴィットリオ・エマヌエル二世はフランス王国の国王に就任し、生糸などの産業育成に乗り出したが、ヨーロッパ南部の蚕だけでなく、インド、フィリッピン、中国の蚕も細菌に冒されていたので、一八六二年に日本の蚕を輸入

する条約を結ばせることにした。イタリア軍人アルミニオンはその命を帯び、先ずパリで日本のフランス公使グロ男爵の日本美術品を見せてもらったのち、日本使節団の柴田日向守に会い、イタリア生糸生産の危機を訴え、日伊の共通性を述べて、日伊両国の友好的な貿易交渉を願った。イタリアで日本関連の図書を研究したのち、帆走軍艦レジーナ号で十一月にナーポリ港を出航し、ジブラルタル海峡、リオ・デジャネイロを経由して一八六二年一月十八日、モンテビデオで帆走蒸気軍艦マジエンダ号に乗り換え、喜望峰からスンダ海峽経由で、四月二十七日にオランダ植民地バタヴィアに寄航した。そこには電信郵便施設があった。オランダ海軍から石炭を補給してもらった。電信によってプロシアとオーストリアの戦闘開始し、イタリアがヴェネツィア獲得のためにプロシア側で戦っていることを知る。シンガポールではガリヴァルデイがオーストリアに対して義勇兵を編成したと聞く。さらにフランス植民地コーチシナの首都サイゴン（一八五八年に建設）で石炭を補給し、六月初に日本へと直行し、七月四日、浦賀水道沖に到着した。下田、横浜（外国人が一五百人ほど）に泊まり、フランス公使ロッシュを頼り、通詞を借りて江戸幕府と交渉し、八月二十五日に江戸で通商条約を調印した。

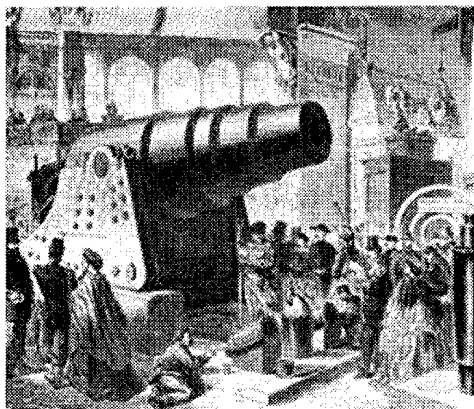
アルミニオンは日本の貿易について詳細に観察する。日本は当時、輸出超過である。輸出品は、絹、茶、乾燥魚、海苔、薬味、朝鮮人

ルで、輸入額に対して四百五十五万四千七百四ドル上回っている。



プロシア首相
ビスマルク

江戸幕府代表、
徳川昭武



博覧会におけるクルップ製大砲

参、蚕糸、綿糸などあり、それらはヨーロッパや中国の港で売られ
る。一八六五年度の価格総額は一千七百四十六万七千七百二十八



ナポレオン三世と各国使節団

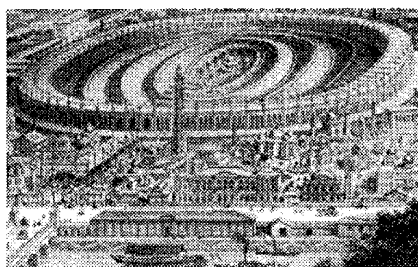


ビスマルク、ウイリヘルム一世、

ナポレオン三世

ここで日本製品の質が論じられていて、それが明治時代の課題がど
こにあったかを示唆する。「絹は本州および大阪の北で生産される。
しかし、とくに生産量が多いのは、奥州、上州、甲州、信州の四つ
の地域である」と。一八六三年、スイスもまたエーメ・アンペール
公使が日本と和親条約を締結した。

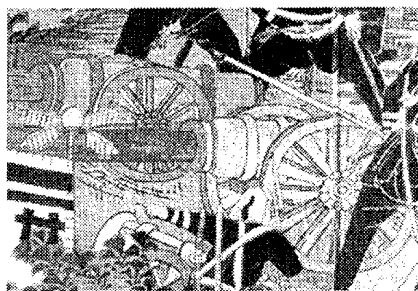
漱石が江戸に生まれて養子にだされた慶応三年（一八六七）、パリ
で皇帝ナポレオン三世のもとで第二回万国博覧会が開催され、幕府



第二回パリ万国博覧会会場、1867年



カパネル《ヴィーナスの誕生》1863年
1867年のパリ万国博覧会で皇帝が購入。



烏羽伏見の戦いにおける薩摩軍の大砲

は徳川慶喜の弟昭武を全権大使として参加し出品した。その会場に
はカヴァネルの裸体画《ヴィーナスの誕生》が評判をあつめ皇帝自
らそれを購入した。幕府はこの折に大砲や鉄砲を購入するためにフ
ランスから借款する計画であった。同年八月、ジュネーヴで第一回
「平和と自由の連盟」会議が開催された。この推進者はイギリスのジ

ヨン・ブライト、ジョン・スチュアート・ミル、イタリアのガリヴァルディ、フランスのユゴー、ルイ・ブラン、ロシアのバクーニン、ゲルツーツェンたちであった。九月九日、ジュネーヴの第一回大会席上ではバクーニンが大演説をおこない、中央委員会のために「連合主義・社会主義・反神学主義」を執筆した²⁵。フランス人思想家アコラスも自由平和連盟第一回会議に参加し、ガリヴァルディからの依頼で政治運動をした。その結果、反政府陰謀のかどで一年の懲役と罰金刑をうけた。この平和会議には徳川昭武も参加していて、ガリヴァルディから賛同を求められている。その間にパリでは万博に出席した薩摩藩の妨害で、フランスからの借款は水泡に帰して新式鉄砲も入手できず、鳥羽伏見の戦いや上野での薩長軍との戦いに敗北していた。翌年、昭武はジャポニストであったジェイムズ・テイソから絵を学びだした。江戸幕府は資金不足になり、四月に徳川慶喜は大政奉還をした。官軍では若き西園寺公望が活躍し知事に任命された。

ニーチェとバクーニン、神は存在しない

明治二年、フリードリッヒ・ニーチェはバーゼル大学の古典文献学の員外教授になり、プロシア国籍からスイス人になり、ルツツェルン郊外にいた作曲家ワーグナーを訪れるとともに、バーゼル大学教授で歴史学者のヤーコプ・ブルクハルトと交友を始めた。

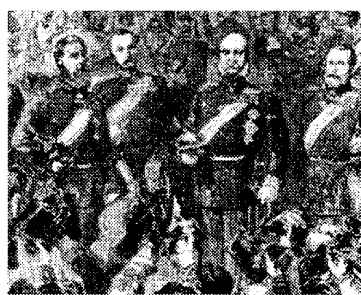
明治三年、ニーチェは「ソクラテスの悲劇」の公開講義をして正教授になり、『ディオニュソスの世界観』を書き、ブルクハルトの講義「世界史的考察」を聴講する。

明治四年、プロシアはナポレオン三世にセダンで勝利してパリに入り、ヴェルサイユ宮殿でヴィルヘルム一世の戴冠式をおこない、ここにドイツ帝国が成立した。敗北したフランスは、二月にはドイツ首相ビスマルクの要求で国民議会の選挙をおこない六四五議席のうち三九五議席(王党派)、二〇九議席(ティエールの保守主穏健派)、四〇議席(ガンベッタの急進共和派)となり、圧倒的に王党派の勝利であった。王党派はプロシアとの屈辱的な休戦条約の責任を負わせないために、ブルボン家を王位には据えなかつた。国民議会はティエールを共和国政府首班にして、ガンベッタ対策のために議会議長にクレヴィを選び、二月二十六日にドイツとは、五十億ドルの賠償金アルザス・ローヌ地方の割譲という屈辱的な平和条約に調印した。アルザス・ローヌ地方出身の議員たち、ガンベッタ、ヴィクトル・ユゴー(一八〇二―八五)、エドカール・キネー、そして公望の友人になるクレマソンは激しく反対したが、議会は多数で同意した。

西園寺公望は明治政府留学生として明治四年にフランスに留学したが、私塾で勉強しだしたとき、パリ・コンミュニョンの爆弾の音に驚いた。スイスにとどまっていたアコラスは、パリ・コンミュニ

ンるときパリ大学法学部長に任命されるが、帰国しなかった。公望は政情不安を懸念して、大和魂をもって日本も処すべしと日本に手紙を書いた。クールベたちはヴァンドーム広場のナポレオン一世の円柱を破壊した。新しい選挙法のもとでは革命政府はすくさま崩壊させられ、クールベは拘禁され、罰金刑に処せられる。

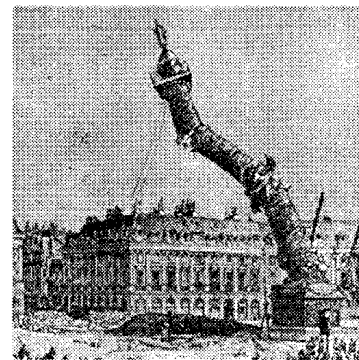
明治六年（一八七三）、フランスでは急進派のガンベッタは普通選挙制、政教分離、常備軍廃止を訴えて勢力を拡大していたので、テイエールはガンベッタ側に寄り、王党派と対立し、五月二十四日に



ドイツ帝国皇帝ウイヘルムの戴冠とビスマルク 1871年



首相ティエール、バクーニン、ガンベッタ、クールベ



ヴァンドーム広場の円柱の破壊 1871年

は王党派〔パリ大司教を頂点とするカトリック勢力〕は不信任案をだし、マクマオン元帥を大統領に選出した。この状況を見た公望は橋本実梁にこう書いた。

嗚呼、欧洲文明開化を世界に誇ると雖も、その国体之確然ならざるより人民互い方向を異にし……惨刻の状を極めざれば

止まざるに至る。²⁶

このように公望はフランスでの政情不安を体験し、「国体」という語で語るが、大学にはいるための勉強のためにミルマンの私塾と、ソー門下で社会主義学説を信奉する札付きの共和主義者ピエール・アコラーズの私塾（ヴォジラール通三四番地）で明治七年まで学んだ。

明治四年九月にやっとパリにもどった公望はここで学ぶうちに当初の「慷慨」の感情は失せて平和熱望者になる。アコラーズはクレマンソーと共著でフランス政府のタブーに触れるパンフレットを書き、日本人なら発覚しないとパリに運ぶことを公望に依頼した。この関係で公望はフランス急進社会党の指導者にして明治三十九年に首相になるクレマンソーと友人になった。留学した頃フランスへは大山巖が勉強にきたので公望が世話をした。明治五年には米欧回覧使節団に随行して中江兆民（篤介）が来てリヨンで普通学〔大学入学の基礎教養〕を学ぶとともに、パリではアコラーズに一時学んだので、中江兆民と公望は友人になった。明治六（一八七三）年の春、徳川慶喜の部下、川村清雄はパリにいて、当地でジャック・ギオーに絵を学ぶ。この年に西郷隆盛の征韓論騒動のために、海外留学生に一斉帰国が命じられた。川村は私費留学に変え、老画家の कोरो を訪問した。おそらく米国で कोरो の絵を知っていたのである。明治六年には岩倉具視を全権大使とする米欧回覧使節団が米欧を駆け巡り、同年のウィーン万国博覧会における日本製品の質の悪さに驚愕し、工部卿伊藤博文はこのよ

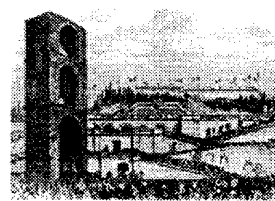
うな工芸品の質の向上に生涯を捧げることになる。明治九年の工部美術学校、明治二十二年の東京、京都、奈良の国立博物館とともに、東京美術学校の開校も伊藤博文の悲願であった。しかし、漱石の『猫』では、皮肉にも博文の意向に反して戦争遂行者として徹底的に揶揄されることになる。それはともかく、明治六年のウイーン万国博覧会は建築ラッシュと泡沫会社を乱立させ、資金回収が追いつかず大恐慌を惹起した。そのとき外来のユダヤ人が金利で儲けて新しいブルジョワジー層を形成しだすので、オーストリアでは反ユダヤ感情が根深くなつていく。

ブルクハルトはルネサンス美術に関心をもった美術史家であるが、彼の関心は当時の世界状況にもあり、一八六九年(明治二年)には『世界史的考察』を書きだし、一八七三年にその再版で営利心の増大と泡沫会社による詐欺に注目するが、一八七〇年(明治三年)に皇帝ナポレオン三世がプロシアとの戦争で敗北したが、フランスは賠償金の支払い能力を保持し、信用を維持することを奇妙に思っている。それだけでなく、当時では、「頭のよい人間」は商売に向かい、もはや官僚や軍人は立身出世の道でなく、その傾向はプロイセンでも同様になる、と観察し、世界にわたる交通網の整備や万国博覧会の時代に精神的な生産、創造的活動が可能なのか、今後は如何なる階級と社会層が教育の担い手になるのか、問うのである。

明治八年(一八七五)にフィレンツェでミケランジェロ生誕四百年祭が挙行された。フィレンツェの南の高台にはミケランジェロ広場が整備された(本頁図版参照)。イタリア王国は産業推進のために万国博覧会を開催しなかったが、国力の点でその力がなかったため、一八七五年(明治八年)のミケランジェロ生誕四百年記念祭をフィレンツェで開催することにして、外国にあるミケランジェロ作品の貸し出しを交渉したが無理であった。そのために、石膏像を制作してフィレ



ミケランジェロ広場
《ダヴィデ青銅像》1875年



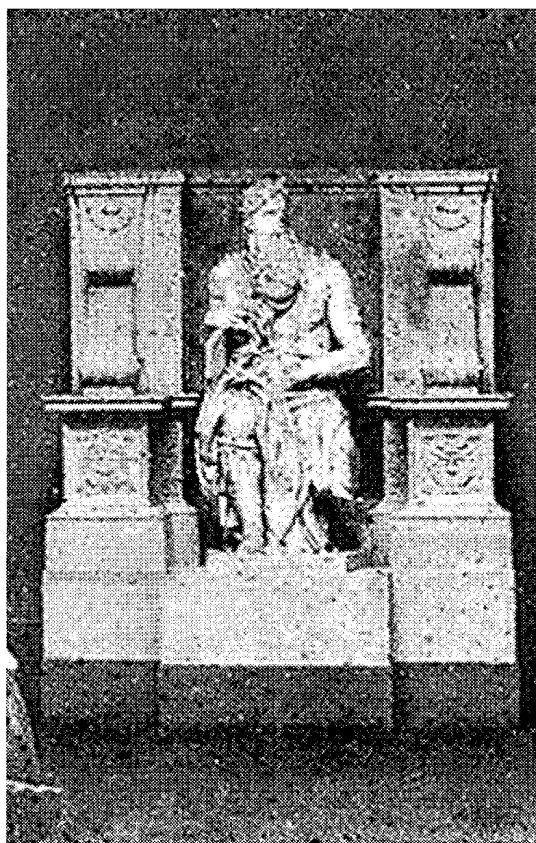
ミケランジェロ広場



ミケランジェロの《ダヴィデ》
アッカデミア美術館に設置
1875年

ンツェ国立美術アカデミー付属の美術館にミケランジェロ作品を展示することになった。その際に、フィレンツェの市役所前に一五〇四年以来設置されていたミケランジェロ作の巨像《ダヴィデ》をアッカデミア美術館に移動し(本頁図版参照)、市役所前には大理石彫刻摸像を置いた。そして、ミケランジェロ広場には、ミケランジェロの彫刻《ダヴィデ》と、サン・ロレンツォ聖堂のメディチ家墓碑の四寓意像《夜》《昼》《夕》《曙》を、青銅像にして、高い台座の上に設置して、フィレンツェの街を見下ろさせた。当時の写真から伺えるように、

ローマにある《サン・ピエトロのピエタ》〔背中が見える〕や《モーセ》〔前頁図版参照〕は石膏像として展示された。こうしてフィレンツェではミケランジェロの祝祭が開催されて、ヨーロッパ各地の芸術家をフィレンツェに導き出し、ミケランジェロ再評価の契機をつけた。このときフィレンツェを訪れた彫刻家の一人にオーギュスト・ロダンがいて、ミケランジェロの彫刻を模写してまわり、サン・ロレンツォ聖堂のメデイチ家礼拝堂にある時の寓意像を模写している。そ



1475年のミケランジェロ 生誕四百年記念祭
《モーセ石膏像》アッカデミア美術館

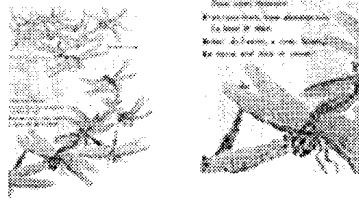
して鼻のつぶれたミケランジェロの顔に想を得て、《鼻の潰れた男》を制作させることになる。当時、西園寺公望はパリの私塾で社会主義思想家アコラスの授業を受けるうちに平和主義者・社会主義者に変貌し、ソロボンヌ大学を卒業した。

明治九年、ドイツで第一回のバイロイト祝祭劇が開催され、ニーチェが来た。ここにはジュディット・ゴータイエも、明治二年以来、二度目の訪問をしていてワグナーを熱中させ、ジュディットは愛を告白される。ニーチェは『ニーベルングの指輪』に失望する。ジュディットが帰国したのちも、ワグナーは文通し、その感激で『パルシファル』の作曲に没頭し、ジュディットをパルシファルの誘惑者クンドリに仕立てた。悔いるパルシファルはワグナーそのものである。ニーチェはバイエルンに行き、『人間的な、あまりにも人間的な』の覚書を書く。十月には病気で休職し、大学の義務を免除される。

明治十一年、第三回パリ万国博覧が開催され、清輝たち日本の洋画家たちを教えることになるラファエル・コランがここに出品した。この展覧会の折に洋画家山本芳粹が絵の勉強のために随行し、商社大倉組の横山孫一郎の世話もあり、パリ国立美術学校教授ジャン＝レオン・ジェロームのアトリエで裸体画を勉強し、必然的にパリ国立美術学校の学生にもなる。パリ万国博覧会には日本画家渡辺省亭もでかけて実技を披露した。そのときテオフィル・ゴータイエもそれを見学し、日本美術に関心を示した。大学を卒業した西園寺公望は自費留学者としてフランスの文学者や画家たちと交友し、テオフィル・ゴータイエとも知り合う。娘のジュディットは、ワグナーとの恋の後、ドラクロワとグロテスク趣味と日本美術を愛好する詩人の父の影響を受

け、日本美術に傾倒し、西園寺公望に『蜻蛉日記』を翻訳させてそれを修正し、山本芳粹に挿絵を依頼するとともに絵も学びだす。

公望は明治十四年に帰国すると、三月に中江兆民らに推されて、社長として『東洋自由新聞』を発行し、兆民とともに自由主義思想をひろめようとしたのである。その思想性に驚いたのは、明治天皇の宮内卿侍従長であった実兄の徳大寺實則である。徳大寺は、明治天皇の配慮で公望を新聞社から一カ月で辞任させた。そして十月、黒田清隆の北海道開拓事業を政府が五代友厚に譲渡した事件がおき



ジュデット・コーティエ
『蜻蛉日記』明治14年



留学時の公望



ジュデット



留学時の芳粹



ジェローム

た。このとき、この秘密を流したのは大隈重信だという噂がながれたために、伊藤博文はただちに大隈を参議から辞職させ、この汚職問題を処理するために、国会開設の勅諭をだした。さらに伊藤は、公望を十一月に参議院議官補に任じた。国会開設の勅諭を受けて、同年には、板垣退助は政党組織づくりを始め、翌年には大隈重信が改進黨を組織する。国会開設という問題は、第三共和制のフランス

で勉強した西園寺には、もつとも適任者であっただろう。公望は伊藤博文に随行してドイツに帝国憲法調査に赴いた。帰国するとベルギー・ドイツ兼任大使に任命されて赴任し、留学していた清輝に出会い、法律家志望の彼に画家になるように助言していた。西園寺公望、画家山本芳粹との関係からも清輝は西園寺に支援者を見出すことになる。

明治十五年、バクーニンの「神は存在しない」

経済力と工業力と軍事力に勝るドイツは巨大国家になりつつあり、皇帝崇拜、ドイツ民族高揚をもたらしたとき、無政府主義者のバクーニンがジュネーヴで書いていた『鞭のドイツ帝国と社会革命—または「神と国家」』は明治十五年に出版された。

キリスト教は……宗教のなかの宗教ともいべきもので……神性のためにする人間性の貧困化、隷属化、絶滅化を、申し分なく暴露し、完璧に表現している。……神の奴隷となった人間は、国家が教会によって聖化されるかぎり、同時に教会と国家の奴隷でなければならぬ。この真理を、キリスト教は……古代東洋の諸宗教よりもずっとよく理解していたのだ。……ローマ・カトリック教だけが、厳格な首尾一貫性をもって宣言し、かつ実現した。……形而上学者や宗教的観念論者、哲学者、政治家、

詩人諸公には氣に入るまいが、……神の觀念は、人間の理性と正義の放棄を含蓄する。それは、人間の自由のもつとも決定的な否定であり、理論上も実践上も、人間の隷従へと必然的に到達するのである。……もし神が存在するならば、人間は奴隷である。ところで人間は自由となりうるし、またならねばならない。したがって、神は存在しない²⁷。……

そして現代のドイツの状況を語る。

彼等の英雄は——貴族の、官僚主義の、政治的の、ブルジョアのドイツであつて、プロレタリアのドイツではない——ドイツ人の英雄は、マツツィーニやガリヴァルディとは対極に立つ。すなわち、プロテスタントの神の凶暴で素朴な代表者であるウイヘルム一世であり、またビスマルクとモルトケ、マントイフェル將軍トウエルダー將軍ら諸氏である。……ヨーロッパの主権者たちと抗争しているローマ教会が手にいれようとした獲物……第一に、教会の世俗的財物、つまりは収入であり、次いでその世俗的権力、つまり、その政治的特権なのだ。

これからバクーニンは独特の比喩で語りだす。

觀念論者の体系のなかでは、歴史は継続的な下降以外のなにものでもない。……純粹絶対の觀念という至高の領域から物質界への死の跳躍なのだ。……それは、あのプロイセンの思想家の

規則的な略奪のおかげで、つまり物質からありとあらゆる属性をばぎ取つて、これを彼等の皇帝、彼等の神に捧げた神学者形而上学者たちのおかげで、尾羽打ち枯らし、赤貧へと突き落とされた抽象的物質なのだ。……このあわれな神、墜落して身を落とし、半死半生のめに会つたこの神が……ゆつくりと目をさまし、ぼんやりした頭で自分自身のことを思い出そうとあくせくする。……もしも、神がそっくり各人のうちに宿るならば、人間はすべてみな神となろう。そのとき、膨大な数の神々がいることになる。……これは矛盾である。……人間靈魂は、いわば彼等の原初的神性の漠たる記憶を持ち続けており、その全一者へと抑えがたい力でひきつけられるのだ。……神は、多数の人間の牢獄のなかへつなぎとめられて散在し、粉碎されたために、われとわが身を求めて愚行を重ねていく。

まず発端は物神崇拜^{フエチンズム}である。あるときには石に、あるときには木の切れ端に、あるときは布切れに、神は自分自身を求めて崇拜する。……子なる神がもはや自分自身を識りえないほど完全に、みずから散布することになった、不滅で、神的で、しかも無限に小なるこれら膨大なる数の小片から、今や父なる神は、一番お気に入りの中を選びたまひ、靈感を受けた者、予言者、「有徳の天才の人間」、人類の偉大な至福者と立法者

たちを作りたまうことになる。それがすなわち、ゾロアスター、仏陀、モーゼ、孔子、リユクルゴス、ソロン、ソクラテス、聖プラトンであり、わけてもイエス・キリストである。キリストこそは、唯一人の人間人格のうちについて蒐集され、集中された子なる神の完璧な実現なのだ。さらにまた、使徒たち全員、わけても聖ペテロ、聖パウロ、聖ヨハネ、コンスタンチン大帝、マホメット、次いでシャルルマーニュ、グレゴリウス七世、ダンテ、若干の人たちによるとルターも同様、さらにヴォルテールとルソー、ロベスピエールとダントン、その他数多くの偉大にして神聖な歴史上の諸人物がそれだ。これらの人物を総なめすることはとうていできない。私は一ロシア人として、ぜひとも、これら偉大かつ神聖な人物のなかに、同国人ニコライ聖人もはいつてなざることを、どうか、お忘れにならないよう、とくにお問い合わせするしだいである。

このようにバクーニンは分散された神々の一覧表を列挙し、バクーニンは科学と芸術を比較する。

生は、全くつかのまの移ろいやすいものであり、しかも現実と個性、感覺性、苦惱、喜悅、希求、情念にじかに手を触れて脈打っている。生だけが、ただ一つ、自然発生的に現実的な事物との一切を造出する。他方、科学は、なにもものも造り出すこと

はない。……科学と科学者の統治は、たとえ彼ら科学の徒がオーギュスト・コントの弟子である実証主義者であっても、あるいはまた、ドイツ共産主義者の空論派の弟子どもであっても、無力であり、嘲笑すべきものであり、また非人間的、残虐、抑圧的、搾取的かつ有害なものたらざるをえないのだ。……彼らは、個々の生身の人間に対して、なんらの感覺ももっていない。……科学は、抽象の領域外に出ることはできない。この点で、科学は芸術よりもはるかに劣っているのだ。なるほど、芸術自身も、一般的類型や一般的状況をそれなりに取り扱いはする。しかし、芸術は、芸術固有の手法によって、それを特有の形式の下に、つまり、現実の生という意味では生きたものではないにせよ、しかもわれわれの理想のうちに、この現実の生の感情や記憶を生きいきと刺激するような形式によって、肉付けするのである。……永遠で不滅の個性を通して、芸術はわれわれの眼前に出没する生身の、ありのままの現実個人を彷彿たらしめるのだ。それゆえ、芸術は、ある意味で、生への抽象の復帰であると言える²⁸。

バクーニンはさらに「フランス語版バクーニン全集において」多神教から一神教への移行をなしたモーゼについて説明した。異教徒の神々は多数であり、物質的な特徴をもっていたが、宗教的物質主

義たる多神教からキリス教徒の一神教への移行が始まる。

モーセその他の予言者たちは、唯一の神について説教したが、効果はなかった。人々は、いつも原始的偶像崇拜へ逆戻りする。

……モーゼと予言者たちが説いた……唯一の神であるエホヴァ自身も、まだ依然として極端に民族的な神であった。……ユダヤ人の神は、ユダヤ人たちが自分といっしょにこれらの「敵対者の」神々を崇拜するのを望まなかった。なぜといって、エホヴァは何よりもまず、おそろしく嫉妬深い神であったからだ。「われは主、なんじらの神なり。なんじら、わが前に他の神をもつことなかれ」(出エジプト紀第二十章第三節)

これが、彼の第一の戒律であった。

エホヴァは、近代観念論の至高の神の、きわめて物質的かつ粗野な最初の下絵であったにすぎない。そのうえ、エホヴァは、ちようどツァーリの臣下であり、ロシア帝国の愛国者でもあるドイツ出身の將軍たちが崇拜したロシアの神と等しく、またベルリンのウイルヘルム一世の臣下であるドイツの將軍や敬虔派が、まもなく宣言するに相違ないドイツの神と同様に、一個の民族神でしなかつた。

こののちにプラトンやヘーゲルの解説になるが、バクーニンがニーチェの『悲劇の誕生』に多くを学んでいることは疑うことができない。

しかし、その逆もまた起こる。ニーチェは明治十五年、ジェノヴァからシシリー島のメツシーナに行き、さらにレーの招待でローマに行つて女流詩人ルー・ファン・サロメと知り合い、五月頃、レーとともにサロメに求婚して断られる。そして『ツァラトゥストラ』第一部の構想がわいてきた。ここにバクーニンの言説が繰り返される。

明治十六年、ニーチェと超人

明治十六年、ニーチェは超人思想をこめた『ツァラトゥストラ』の一部、二部を一気に書き上げた。そしてニーチェは『ツァラトゥストラ』において、超人はモーセのような者であると説明し、「汝人を殺すなかれ」という十戒板を投げて民衆を殺したモーゼのように、独裁者で殺人者であると説明していた。そのとき、ニーチェの念頭には、バクーニンのモーセ論を通して再解釈されたミケランジェロの『モーセ』論があつた。ニーチェのこの超人は、ブルクハルトが一八五八年の『チチエローネ』で説明した「超人間的・奇異・グロテスクなもの」を求めるミケランジェロの「超人的な」『モーセ』にある。さらにはその言い回しは、一八六二年にシュトゥットガルトで出版されたゲーテの『イタリア紀行』の一八九頁にもみられる。『イタリア紀行』は一八一四年から執筆されだし、「第二次ローマ滞在」が一八一九年から二九年まで編纂されて、一八一九年に公刊されている。ゲーテは一

八三五年に没したが、一八六二年版に「超人的」というモーセ解説が
ついた理由は不明である。ニーチェは『ツアラトウストラ』の
「至福の島々にて」の牢獄を鉄槌で破る超人を創作した。

いちじくの実が木から落ちる。……さあ、その果汁と甘い肉
をすするがよい。時は秋だ、清んだ空、そして午後。

かつて、人々ははるかな海を眺めたとき、「神」と言った。

しかし今わたしは君たちに教える、そのとき「超人」と言う
ことを。……君たちの理性、君たちの心象、君たちの意志、

君たちの愛そのものが、世界とならねばならぬ。

この希望がなければ、どうして君たちは生に堪える気にな



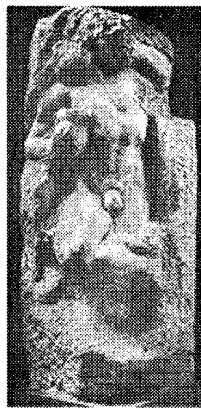
ミケランジェロ
《モーセ》の頭部



ニーチェの写真



ミケランジェロ
《奴隷「アトラス」》
1530—34年頃、
フィレンツェ、アカデミア美術館



ミケランジェロ
《覚醒する奴隷》
1530—34年頃、
フィレンツェ、アカデミア美術館

れようか。もし神々があるとすれば、わたしはどうしてわた
しが神の一人でないことに堪えられようか。だから神は存在
しないのだ。……しかし君たちは超人を創造することはでき

るだろう。……創造——それは苦悩からわれわれを解放する

大いなる救いであり……創造する者が生まれ出るために、苦
悩と多くの変身が必要なのである。……わたしの熱烈な創造

意志があつて、それが常に新たな人間へとわたしを駆り立て
るのだ。芸術家の鉄槌を石材へ駆り立てると同じように。

ああ、人間たちよ、石の中に一つの像が眠っている、わた

しの思い描く、像のなかの像が。ああ、それが最も堅い、最
もみにくい石のなかに眠っていないとはならないとは。

いまや、わたしの鉄槌は、この牢獄を破るべく、すさまじ

い力をふるう。石から破片が飛び散る。だが、そんなことに
頓着してられようか。

わたしはこの制作を完成しよう。わたしは一つの影の訪れ
をうけたからである。超人の美しさが、影としてわたしを訪
れたのだ²⁹。

この文章はデ・キリコが影を描いたメタ・フィジカ絵画《ある秋の
午後》に創造契機を与えたが、同じ頃に漱石にも影響を及ぼしていた。
この最初の出だしは、ダンテの『神曲』煉獄篇の地上楽園のくだりを
思わせる。超人はなぜ牢獄の壁を破ろうとするのか。ミケランジェロ
がユリウス二世墓のために、《囚われ人》を制作していたからである。
そして「石の中に一つの像が眠っている」という言葉はミケランジェ

口の詩からの引用である³⁰。したがって、ここでニーチェが語る超人は芸術家ミケランジェロ、そして芸術家一般のことである。ツアラトゥストラは人々に向かって、デカダンスからの脱出方法として芸術家になることを勧める。芸術家になろうとして、本人がなり得なかったとしても、孫が芸術家になる可能性はあるというのである。ニーチェの言説において、石の中に一つの像が埋まっているとして、それが最も醜い石の中に埋まっている、という言説またミケランジェロの詩に由来する。ミケランジェロは自作の詩で「私は醜い」と書いたが、グロテスクな幻想的な詩のひとつでは、鯨を蠅のように見る巨人を創造していた。その詩の中で、女の巨人は人が病気になる大きくなり、人が幸福になると小さくなる。命を賭した戦争を体験したミケランジェロは、独裁者を批判すべくグロテスクな巨人を彫刻や詩で創作したが、巨人族はダンテの『神曲』の地獄の凍った巨人までたどれる。

明治十六年、ジュディットの肖像画

パリでは、ジュディットは山本芳粹から絵を学ぶとともに肖像画も描かれた。ジュディットの肖像画と想定されている絵《西洋婦人像》の女性は鼻が高く首飾りをつけ、胸を強調したドレスを着ていて、いかにも上流社会の女性の特徴があるが、横顔という点では、アメリカ人画家ジョン・シンガー・サーゼント（一八五六一—一九二五）が明治

十七年に描いた《X夫人（ゴートルー夫人）》（一八八四）の洒脱な横顔肖像画を髣髴させるので、その頃の作品かもしれない（芳粹が帰国するのは明治二十年（一八八七））。東京芸術大学にはサーゼントが、明治十六年（一八八三）に描いた素描《ジュデット・ゴージェイエの肖像》が残されていて、その瞬間的な表情からしてジュディットが印象



山本芳粹《伝ジュディット・ゴージェイエ》明治16年頃



サーゼント《ジュディット・ゴージェイエ》明治16年
東京芸術大学資料館

派グループの画家たちとも交友していたことが分る。サーゼントはサロンに《X夫人（ゴートルー夫人）》を出品したが、ゴートルー夫人とその家族と批評家はその絵を非難したために、悪名をえて、翌年の一八八五年（明治十八年）にはロンドンに去ってしまい、ホイットスラー



《自画像》



《マダムX》
1884年、
コートールド美術館



《カーネーション、
ユリ、バラ》
1883—86年、
ロンドン、
テート画廊

たちと交友してロンドンのグロスベナー画廊の出品者として完璧に外光的印象派に変貌してしまう。印象派は総じてジャポニストであったが、芳粹たちの影響は大きかったかもしれない。漱石がイギリスでの

ちに見たにちがいないサーゼントの名作《カーネーション、ユリ、ユリ、バラ》は彼のロンドン到着直後の作品であり、その中の提灯やユリの花が示すように日本的な風俗の傾向を示している。

中江兆民は公望と社会主義新聞を発行していたが、公望がやめさせられたために、その埋め合わせでもあるかのように明治十六・十七年に政府発行の翻訳書『惟氏美学』（明治十一年が原書の初版）を発行して、自由主義的な第三共和制的なヴェロンの独創性美学を日本に紹介し、ミケランジェロやドラクロワの芸術哲学を推奨した。この『惟氏美学』を理解するためには、万国博覧会における競争でフランスの威信を回復させるためにパリ国立美術学校の改組を提案した建築家ヴィオレ・ル・デュックの独創性の要請が理解されねばならない。各国は戦争のために軍事費を増大させていき、明治十七年にヨーロッパは不況に襲われ、ゴージャンも失業して画家の道を選び、地獄の生活に突入していく。この不況は徐々に日本にも襲いかかるだろう。日清戦争、日露戦争による日本の資本主義の台頭と、労使間の社会問題が噴出し、ニーチェの思想が日本にも上陸してくる。そして内村鑑三と高山樗牛の国体論争が起こり、そしてまた中江兆民の弟子の幸徳秋水による社会主義が台頭してくる。夏目漱石が『猫』にニーチェを登場させた理由は、このような社会主義運動の高まりと無縁ではなかった。明治三十八年十月、幸徳秋水の同志である堺利彦が漱石にエンゲ

ルスの肖像写真つきの絵葉書とともに、『猫』の感想文「家族の者を相手に三夜続けて朗読会を開きました」と書き送ったのも³¹、この小説の内容を暗示している。

註

- 1 『明治文学全集40・高山樗牛・姉崎嘲風・戸張竹風』（筑摩書房、一九七〇年）を参照。
- 2 植野建造「白馬会と裸体画」『近代画説5』一九九七年、一四頁以下。
- 3 池上忠治監修『エルミタージュ美術館展・フランス近代絵画の流れ』安田火災美術財団、一九八八年、図六一、一六一頁。
- 4 飯島虚心『河鍋晩斎翁伝』河鍋楠美監修・吉田漱解説、ペリカン社、昭和五九年、一八一頁。「泣くあり、笑ふあり、怒るあり、訴ふるあり、一挙一動、千態万状、真に唐子遊びの一活画なり」の変形。
- 5 『正岡子規全集第一巻』改造社、昭和六年、二二八頁。
- 6 中村不折『画界漫談』大倉書店、明治三九年、一二三頁。
- 7 『小泉八雲全集第四巻』「心」、第一書房、昭和二年、三四四―三四六頁

- 8 『小泉八雲全集第四巻』「心」、第一書房、昭和二年、三四三頁。
- 9 アドルフ・フィッシャー「変容する日本美術界」松井隆夫訳、『近代画説』一巻、一九九二年。
- 10 吉田千鶴子「黒田清輝の意見書」『近代画説5』一九九七年、四一頁。
- 11 カーライル『仏蘭西革命史・中巻』高橋五郎訳、幸田露伴補筆並評、国民文庫刊行会、大正十五年十二月、五二七―五三三頁。
- 12 正岡子規『歌よみに与ふる書』岩波文庫、一九五五年、一九九一年、九三頁。
- 13 『西園寺公望傳第二巻』岩波書店、一九九一年、二〇五―一六頁。
- 14 『西園寺公望傳第二巻』前掲書、二一〇―二二一頁。
- 15 『住友春翠』芳泉会、昭和三十年、再版昭和五〇年、二八八頁。
- 16 John Ruskin, *Modern Painters*, New York, 1987, pp.274―280.
邦訳、ジョン・ラスキン『構想力の芸術思想、近代絵画論・原理論2』法蔵館、二〇〇三年。
- 17 ダールについて以下の論文を参照。Richard Verdi, *A Discovery "Moonlight" by Dahl*, *Burlington Magazine*, February 2005 CXLVII.
- 18 Jacob Burckhardt, *Der Cicerone Eine Anleitung zum Genuss der Kunstwerke Italiens Erst Band*, Jacob Burckhardt Gesammelte Werk Band IX, Basel/Stuttgart, 1970, p.144.
- 19 Jacob Burckhardt, *Der Cicerone Eine Anleitung zum Genuss der Kunstwerke Italiens Zweiter Band*, Jacob Burckhardt Gesammelte Werk Band X, Basel/Stuttgart, 1970, p.73.
ヴァザリー「シケランジェロ伝」田中英道・森雅彦訳、『ルネサンス画人伝』白水社、一九八二年、三四四頁。
- 20 レッシング『ラオコーン』齊藤栄治訳、岩波文庫、昭和四五年、二八一―二八二頁。
- 22 *The Analysis of Beauty by William Hogarth*, A Riprint, Chicago, 1908, p.151.
- 23 Gotthold Ephraim Lessing, *Gesammelte Werk, Fünfter Band, Antiquarische Schriften, Laokoon*, Berlin, 1955, pp.166―167.
- 24 Cf. *I Nazareni a Roma*, Galleria Nazionale d'Arte Moderna, 1981 (De Luca Editore), pp.389―391.
- 25 『世界の名著53』プルードン、バクーニン、クロポトキン』中央公論社、一九八〇年、「バクーニン年譜」を参照。
- 26 『西園寺公望傳第一巻』岩波書店、一九九〇年、二七〇頁。
- 27 『世界の名著53』プルードン、バクーニン、クロポトキン』前掲書、二〇一―二〇三頁。
- 28 バクーニン、前掲書、三三八頁。

29 ニーチェ「ツァラトゥストラ」『世界の名著・ニーチェ』中央公
論社、昭和四一年、一五〇—一五三頁。

30 The Poetry of Michelangelo, An Annotated Translation by James
M. Saslow, New Haven and London, p.302.

31 荒正人著・小田切秀雄監修『漱石研究年表』集英社、昭和四九
年、三九五頁。

〔補註〕アルミニオンに関しては、『イタリア使節の幕末見聞記』（大
久保昭男訳、講談社学術文庫、二〇〇〇年）を参照。